
無能な三十路ニートだけど異世界来た

ガイアが俺輝けと囁いてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無能な三十路ニートだけど異世界来た

【Nコード】

N4453X

【作者名】

ガイアが俺輝けと囁いてる

【あらすじ】

三十歳、薄毛の職歴なし引きこもりニートに幼馴染のエリートが提示した仕事はある世界的ゲームの日本サーバー運営の手伝い。そして迎えた正式オープンで謎の世界に飛んだ俺は『こいつは外れ、捨ててこい』と王様に一目で捨てられた。無能でコミュ障な俺は人権もない生き馬の目を抜く社会で生きていく事が出来るのか。

無能な三十路ニートだけどエリートがお情けの仕事くれた(前書き)

この物語はフィクションですが実在の人物に似たような出来事があつたような気もしないでもない。

無能な三十路ニートだけどエリートがお情けの仕事くれた

ああ、こいつは外れだな、連れて行け

かび臭くて、じめじめした石造りの部屋から引き出された俺は、でかい城の中を引きずり回された拳句、王様にそう宣言されて、『文字通り』そのまま城の外に捨てられた。

石造りの部屋から引きずり出されて、捨てられるまで説明ゼロ。

『ようこそ』とか、『すみませんが…』とかもなし。

言われたのはただ、『こいつは外れ、連れて行け』のみ。

ブラック企業とか圧迫面接とかいうレベルじゃない。

もつと恐ろしい扱いを味わって、自失…ただただ茫然自失…！

白痴…脳みそ真っ白………！

なんじゃこりゃ、何が起こった？

日本語だったから日本だよな？

周りを見渡してみると、明らかに日本より文明レベルの劣った木と漆喰でできた建物ばかりが目だつ城下町で、石畳の地面と合わせる
と日本と言うよりはファンタジーの世界だ。

『なんだ、これドッキリか？』と考えつつ投げ捨てられた塀の外に
座り込んでいると、近くに居た浮浪者がやってきて俺に手を貸して
立たせてくれる。

ありがとと礼を言いつつ、そのまま立ち上がると、浮浪者は優しく俺の来ていた上着を脱がせ、それを抱えて去って行った。

（ 。 。 ）ポカーン

どうやら、窃盗にあっただらしい。
あまり治安は良くないようだ。

そんな様子を見ていたのか、茶色の前掛けをした女二人がひそひそ話しながら、気の毒な人を見る目で俺を見つつ通り過ぎていく。

高校から学校と家を往復するだけの日々、大学の3年から30まで引きこもりニートを続けてた俺には人と話すのもかなりのストレスだが、この意味不明状態ではそんなことも言ってもらえない。なげなしの勇気と匿名掲示板で鍛えた煽り耐性をフル活用して周りに話しかけることにした。とりあえず道行く中世ヨーロッパ風の婦人に『すみません…』と声を掛けてみたが、目も合わせてくれずに歩き去って行く。

ああ、すいませんキモいですよね。ごめんなさいでした。
自分の格好と言えば、三十にして禿げて薄毛の頭に上半身肌着のチノパンですもんね。

よく言われてましたよネットでも。
お前人生オワタwwwテラキモスwwwって。

そのまましばらく待つて話の分かりそうな中年のおじさんに話しかけてみるが、

『今忙しいから、すまんね』

『申し訳ないけど、余裕ないんだ』

等の反応がいいところで、大体はほぼ無視。悪いところではいきなり蹴られた。

何でこんなことになったのか。
そうあれは、俺が久しぶりに家から出たお盆から始まった。

…おい、大宮！お前大宮じゃないか？

お盆の熱い夏の日。

久しぶりに家から出てコンビニに漫画を買いに行った俺に話しかけてきたのは

幼稚園から大学まで一緒だった幼馴染の浅野雄太だった。

『おまえ、心配してたんだぜ。同窓会にも出ないし。』

大学に来なくなつて電話した時には、お母さん部屋から出てこないつて言うし。』

輝くような笑顔で嬉しそうに言うこいつは俺と同じ某地方有名大学を卒業後、某日本を代表する総合商社に勤め、世界を股にバリバリ活躍するビジネスマンだ。

輝くような笑顔で俺のひきこもりについて話しているが、本人はバカにしているわけじゃない。

こいつは俺を本気で心配しているのだ。

思い起こせば、小学校や中学で俺がイジメられている時は俺がボツチにならないように修学旅行の班に入れてくれたり、引き籠ってる時は大学のノートを貸してくれるなど何とか卒業できるように手を

貸してくれた。俺が引き籠ってからも毎年、唯一年賀状を送ってくるし、海外から帰ってきた時には毎回お土産をもってくる。俺は部屋から出ないので親が受け取るけど。

要するにいい奴なのだ。社会的には。

ただ俺にとつては、自分が惨めになるからあまり関わらないで欲しいのだけでも。

俺は苦笑いし頭を下げるとコンビニ袋を持って家に帰ろうとする。

そんな様子に気づいたのか、浅野は『ちょっと、携帯番号教えるよない？じゃあこんど自宅に掛けるわ』などと言って、離れた所で待つ友達の元へ戻って行った。どうやらお盆に帰省して、友達と遊んでいる途中だったらしい。すぐに離してくれたのは人見知りな俺に遠慮してくれたようだ。

さすが商社勤務。空気が読める。

そして、俺がそんなことがあったのも忘れた9月。自宅に浅野から電話がかかってきた。

曰く、仕事する気ないか？

話を聞いて要約すると、総合商社として取引してるシンガポールの企業からコンテンツライセンスを購入することになって子会社でゲームの日本サーバーを運営するんだが、運営に参加しないか。給料かなり安いけど。

って話だった。

最初は怪し過ぎて、警戒した。

しかし詳しく話を聞くと、何でも彼が初めてリーダーとなって取引してるグループ企業で会社の儲けにはならないもののグループ全体の関係を維持するために恩を売っておきたい。

だから儲けよりも信頼できる知り合いがいいんだよな。それなりに頭良くて。

と内情を隠さず話してくれた。

要するに会社の同期などのライバルの息がかかってない裏切りにくい人材が欲しいらしい。

足の引つ張り合いとは大企業勤めも大変だなとは思ったが、引きこもり職歴なし三十の俺に仕事なんかできるわけないのでもちろん断った。

そしたら、相手は一枚上手だった。

俺が断るのを見越していたのか、親にこういう仕事なら紹介できるんですが…

と前もって根回ししていたのだ。さすが大手商社。優秀だ。

俺が電話で断った途端に親号泣。

あんた折角、浅野君が紹介してくれるのになんてことすんのおまえ、それ断るなら家から出ていけ。

そう言っつて二人とも号泣。

そんなこと言われたらさすがの俺も断れずに働くことに。

そんなこんなで働くことになって一人で上京。

引きこもりから会社の寮暮らし。いきなり社会人一人暮らしにクラスアップした。

仕事は会社で日本サーバーの テストプレイヤーかつ

家電量販店やネットカフェへの営業。

テストプレイヤーは同僚に元ヒキも多く問題なかったが、営業はキ

ツかった。

理由は人と会うから。でも総合商社の子会社っていう肩書なので結果として参加してくれる取引先は多かった。

時間的にもプレイヤー：営業＝3：7ぐらいの時間比率だったので、合計一か月しかやらなかったが、元ヒキにしては何とか他人と話せるぐらいになった。

そして俺が働くようになって1か月後。ついに正式サービス開始の日が来た。

感想は『早ええ』の一言に尽きるが、欧米の正式サービス開始と合わせたかったらしい。

正式サービスでの仕事として俺にはゲーム内のサクラ的な役割が与えられた。

本来はサーバー管理とかすると思うのだが、まだ見習いレベルの間だからしょうがない。

浅野も当日は参加するとのこと、俺の隣の席で一緒にサクラを手伝うことになった。

本人は取引先が力入れているプロジェクトだからとか言ってたが、実際は俺の事が心配で気を使ってくれたようだ。

忙しい中、子会社まで足運ばせて、浅野マジですまん。

そして正式サービスが開始する時刻になり、

俺や浅野のパソコンが一斉にゲームにログインすると。

ゲームのディスプレイが一斉にもやもやと霞がかった様に不鮮明になり

強烈な光と共に、俺や、浅野を含む数十人は薄汚れた石造りの部屋にいた。

そこで、俺は浅野と話す暇もなく、いきなり槍を持った兵士に首根っこを掴まれると、一番最初に王の前に連れて行かれ、そのまま捨てられた。

あれから城門からちょっと離れた場所に移動した俺は、そのまま座り込んで様子を観察していた。

浅野も出てくるかと思ったが、俺が出てきて3時間がたつというのに誰も出てこない。

辺りは薄暗くなり、人通りが無くなり、道の隅に娼婦だろうか、派手な色彩の服を着た女性がポツポツ立ち始めた。

ああ、こいつは外れだな、連れて行け

王様の汚いものを見るかのような目を思い出す。

あの数十人の中で必要なのは俺だけだったのだろうか。もう肌寒くなった城下町の空気に凍えつつ俺は膝を抱え、ウツウツと声を殺し切れずに泣いた。

無能な三十路ニートだけどエリートがお情けの仕事をくれた(後書き)

ニートとチートって似てる

俺のステータス

???

持ち物

Eシャツ&パンツ…体力+1

Eスニーカー…敏捷+3

Eチノパン…体力+2

無能な三十路二丁だけどヘイシーズが仕事くれた(前書き)

2日目

無能な三十路二トだけどヘイシーズが仕事くれた

朝

俺は城から離れた城壁の近くで目を覚ました。

夜中、城門のある大通りの一角であのまま蹲って泣いていると、やってきた娼婦に、『そこはあたしの縄張りなんだけど…』と言われて『ごめんなさい…』で歩き出した俺。『えぐっ…えぐっ…』としゃくりあげながら、大通りを城に沿って東に歩いて、突き当たった町全体を取り囲む城壁の下で眠っていた。

まだ時間的には日が出たばかりで早いけど、行く所もやる事もないので城門まで移動しよう。浅野や同僚の誰かが出てれば、何か知ってるかもしれない。

しばらく待っている間に気付いたが、この町の人は朝が早いらしく、日が出たばかりだというのに井戸汲みしている少女や登城する兵士などが散見される。

俺は昨日の経験から、道に立っていると兵士に追い立てられると思い、人の邪魔にならないように城門が見える昨日の位置を確保。ここを縄張りにしてはいる娼婦も当然にすでにいなくなっていた。

俺がいる場所は建物と建物のかげのくぼんだ場所であるため、囲まれている建物の各家庭で朝ご飯を用意し始めたのか俺の座る一角までおいしそうな匂いが立ち込めてくる。

その匂いに煽られて、腹の虫がぐうとなる。そこで、昨日の夕方か

ら何も飲み食いしてない事に気付いた。

水でも飲もうかと思い、先ほどの少女が使っていた井戸に近づくが、そばにいたゴツイ男に睨みつけられ追い払われた。どうやら浮浪者は井戸を使えないらしい。

それに涙でぐしょぐしょでさらにキモくなってるであろう俺の顔を見て、とても嫌そうな顔をされた。こんな事なら夜中にこっそり飲んでおけばよかった。

俺は、どうしても水が飲みたくてたまらなかつたので、ここから離れたくはないが、水を飲むため城門の前でT字路になっている大通りをさつきまで寝ていた東に向け移動する。昨日寝る時に気付いたのだが、火事への備えか大きな水瓶に水が入っているのを見つけていたのだ。大きな水瓶の中の水は蓋がしていないこともあって、枯葉などが底に溜まっている。飲んで大丈夫なんだろうか？ものすごく不安だが、ためにしに両手で水を掬い、一口飲んでみる。：ウマい！生臭い池の水の味を想像していたのだが、冷たいミネラルウォーターのような味がしたため、がぶ飲みする。

水を飲み、城門のそばの監視スペースに戻った俺は、昨日俺の上着を盗っていった浮浪者を発見。奴は城門から横に10メートルほどの位置に陣取って座っていた。

あいつのせいでシャツだけで寒い一晚を過ごすことになったので、文句を言うなり、取り返すなりすればいいのかもしれないが、反撃されると怖いので何も言えなかつた。

動きがあったのは、昼少し前、城門の奥がにわか騒がしくなり、何事かとみていると、俺と同じような現代の格好をした男性が屈強な兵士に担ぎ上げられて連れ出されてくる。

同僚が来たと思い、近づいて話しかけようとするが、よく見ると明らかに茶髪に革ジャンのリア充。同僚ではないようなので遠巻きに様子見をすることに。なんでかつつと、俺は元ヒキの人見知りなんで。あとあいつの名前を知らないのでリア充と呼ぼう。

どうやらリア充は城の中で気に喰わないことがあつたらしく、『これはどう言う事だ』『お前ら絶対に後悔させてやるからな』など兵士に怒鳴り散らしつつ、ポカポカ殴りつけているが、兵士は意に介すことなく門までやってくると外にリア充を放り投げた。重力で負の二次関数に沿った放物線を描いて地面に落ちるリア充。昨日の俺を見てるようでリア充に親近感が湧く。

連れてきた兵士は門の外にリア充を投げ出すと城に戻っていく。リア充は起き上がると怒り狂い城門に突撃したが、走り込んだところを門番に殴られて綺麗なカウンター状態に。門番のパンチを支点に90度綺麗に体を回転させ、倒れた所を暴れ出さないようそのまま肩を右足で踏みつけられ動きを止められた。

すげえ痛そう…しかもあの靴、鉄でできてるから骨折れちゃうよ

気の毒なりア充は鉄の籠手で殴られた鼻が血だらけの噴水状態でもう完全にグロッキー。

兵士が足をどけた後も、倒れたまま全然動かなかった。

どう見てもスポーツマンタイプのリア充がこれなんだから兵士どれだけ強いんだよ…

兵士はしばらくリア充の様子を見ていたが、そのうちにもう一人の兵士に向かって首を振り、仕方ないねと言うように首を竦ませ。

持っていた槍を逆手に取ると。

そのままリア充の胸にどすつと突き立てた……………えっ？

やだなあ、俺疲れてんのかな。見間違えてねえ？

(つ　)ゴシゴシ

…槍が…

(.;。)

刺さつとる！

((。))

口からごぼごぼ血を吹きながらビクビク震えるリア充。
どう見ても致命傷です。本当にありがとございました。

口を開け、呆然と見守る俺。

血を吐いて痙攣するリア充。

門の所定位置に戻り談笑する兵士×2。

大通りを流れて横切る血を何事もないかのように避けて歩く通行人達。

瀕死のリア充の靴を奪おうと足にまとわりつく浮浪者。

ちよwwwコレ何www？

目の前で人間死んでんだけど。

画太郎で言ったらでボタンキュツなんだけど。

英語でsayしたらBatank!

関西風に言ったら人が死んでんねんで!

あつ僕。引きこもりだから知らなかつたんですけどコレ新しいコントですか?

ええそうです。あそこの兵士達も芸人で芸名はエイシーズ。

ですよねー。

……現代日本では考えられないような状況に直面し、しばらく意識が混濁し半狂人化していた俺だったけど、気が付くと、リア充は動きを止め、浮浪者は靴を持って去り、俺はエイシーズに手招きされていた。

エイシーズに呼ばれた俺は、弱小動物のサガかその場を一步も動けなくなっていた。

意識が飛んでる時に少しずつ近づいてたのか俺とリア充の距離は1

メートル。

エイシーズとの距離は2メートルほど。

その2メートルは俺が進むはとてつもなく遠い。

そして逃げるにはとてつもなく短い。

それでそこにぼけつと突っ立ってる。

頭真っ白……何も考えてない真っ白……

俺がそのまま動けなくなってることに気付いたのか、エイシーズが近づいてきて、

俺の肩を叩いたり、頬を軽く張ったりして正気を取り戻させる。

ああ、と気づいて愛想笑いすると、ヘイシーズ様は

「この死体を墓地まで運んでくれ。礼は払う」と仰られました。

墓地でございますか。わたくしめが運ぶんですか？

しかしながら旦那様方、わたくしめは墓地の場所を知りませぬ。

ああ、なら町の外に放っておけばいいと。

それに身に付けている物は好きにしたいと？

そう言われて、自分が死体処理という仕事を請け負おうとしているのに気づきました。

死体処理という仕事。

さすがに抵抗があり、だんまりしてしまう俺。

ヘイシーズは俺がまだ死体を怖がってると思ったのか、リア充の着ていた革ジャンを剥ぎ取り、笑顔で俺に着せて、「な、もう死んでるから怖くないぞ」と背中をポンポンと叩き、落ち着かせてくれる。

断るべきだ。こんな事願い下げだ。

何より、こいつらは人殺しだ。

言え、言うんだ。断るって言うんだ。

そう思った俺が口を開いた時、リア充から剥いだ革ジャンについてた血が、『つつつ』と俺の右腕を伝って流れていく。

結局、口から出た言葉は

「わかりました旦那様」

という、愛想笑いのこもった見下げ果てた一言だった。

ヘイシューズから薄汚れた布を貰った

俺はリア充を東の城壁の外に運ぶため、薄汚れた布の上にリア充を載せると落とさないようにズルズル引きずって運んで行った。

途中、通行人の綺麗な女性俺を見る目がゴミを見るみたいで辛かった。

東門から来たおじさんたちはすれ違う時に明らかに嫌そうに俺を避けた。

恥ずかしいのと辛いのを誤魔化すため、俺は自分をキリストだと考えた。

リア充は十字架で俺は磔にされるためゴルゴダの丘に登ろうとしているのだ。

そのためにリア充を運んでいるのだ。

人々の目は蔑みじゃなくて憐憫なのだと考えた。

そういうプレイだと考えた。

いざそう考えると、リア充からはぎとった革ジャンに付いていた血が袖から落ちていくのが、俺が拷問を受けていたみたいで興に乗った。

そう考えていたら、半分ほど行ったところから辛さはあんまりなくなっ

城壁を出るころにはまるで英雄になったかのような気分だった。

ヘイシーズには外に放っておけばいいと言われたけど。

リア充から剥いだ革ジャンがリア充の払った埋葬料に思えてきて落ちていた木切れを使って穴を掘った。

リア充が死んだのは昼前だったはずだけど、終わった時には夕方だった。

穴に入れる前に、リア充の服をどうしようか思ったけど、血まみれのシャツ以外は埋葬料としてもらうことにした。

リア充も埋めてもらったんだから文句は言わないと思った。

埋葬を終えて、城門に帰るとヘイシーズのリア充を殺した方が俺を待っていた。

交代の時間は過ぎていたけど、俺の帰りを待っていてくれたらしい。リア充を埋めてきたと伝えると、ありがとう、と感謝されて見たことないコインを10枚ほど貰った。

いくらぐらいの金額かわからないけど、わざわざ俺を待っていたほどだから適正な金額なんだろうと思った。

俺は礼を言って、監視ポイントに戻った。

ヘイシーズはそのまま家に帰って、しばらくしたら門は閉じた。

門が閉じて、人通りが無くなると、リア充の事を考えて涙が出てきた。

『俺は昨日も泣いたのに、今日も泣くんだ』と思った。
血の乾いた布にくるまり、我慢して声を殺して泣いた。

気が付くと、ここを縄張りとしている娼婦が俺に背を向けて立っていた。

俺が急いで場所を移ろうとすると、泣いている俺を憐れんだのか『そこにいていいよ』と言われた。

彼女の顔を見ると、今日、俺が昼にリア充を運んでいるときにゴミを見るような目で見ていた女性なのが分かった。

あんなに綺麗なのに娼婦だったんだと思った。

俺は彼女が男に買われていくのを見届けると泥のように眠った。

無能な三十路二一トだけどヘイシューズが仕事くれた(後書き)

俺のステータス

???

持ち物

E シャツ&パンツ ∴ 体力 + 1

E スニーカー ∴ 敏捷 + 3

E 革ジャン ∴ 防御 + 5

E チノパン ∴ 体力 + 2

E 革ベルト ∴ 魅力 + 1

血だらけの布

謎コイン × 10

(死んだリア充の糞尿まみれ品)

ジーンズ ∴ 防御 + 3

ボクサーパンツ ∴ 腕力 + 1

用語等

リア充 ∴ リアル(現実)が充実している人の事

無能な三十路ニートだけど自活を試みた(前書き)

前回のあらすじ

適当に書いた作品が1日でガチ作品のユニーク記録更新して泣いた

3日目

無能な三十路二一トだけど自活を試みた

朝起きると同時に猛烈な空腹を感じた。よく考えたらこの世界に来てから三日もたつが、口にしたものと言えば防火用の水瓶の水ぐらいなので当然といえは当然だ。城門はまだ閉まったままで、ある程度日が昇るまでは動きがなさそうなので食事を探しに行こう。このまま待っているだけではいつか死んでしまう。

まず手始めに、俺は街中のゴミ箱がないか探すことにした。昔読んだ元ホームレス社長の本に、空腹で苦しんでいる時にゴミ箱を漁って残飯を手に入れる話があったのでそれを参考にしたのである。

血だらけの布とリア充の汚物にまみれたジーンズなどを丸めて監視ポイントに隠すと、とりあえず城門前のＴ字路を南に、町の中央に向かって歩き始めた。

途中、登城する軽装鎧姿の兵士や朝早くから仕事場に向かうのであるろう小ざつぱりとした青年たちとすれ違いながら、アメリカの街のようなゴミ箱がないか探しながら歩いているが、それらしき物はまったくくない。中世ヨーロッパの様に窓からゴミを投げ捨てる方式なのかとも思ったが、それも違うらしい。どうやらごみ収集のシステムなり、処分方法がそれなりにあるようで十字路で見つけたオープンテラスを持つ飲食店のような建物の外にも、ゴミ箱は存在しなかった。

「飲食店があるなら、もらったコインで食事できるかも」

一人呟いて、建物を見るが、中は明かりも灯っておらず、人の気配もない。

後でまた来てみよう。

町の中をこれ以上歩いてもしようがないので、とりあえず元来た道を戻る。

帰る道すがら、昨日リア充を埋めている時、ちょっと離れた場所に小川が流れていたのを発見した事を思い出した。『魚でもとれれば』と思っただけに行く事にする。ついでにリア充が死んだ時に漏らした糞尿まみれのパンツの洗濯もしようと、隠しておいた荷物を回収してから向かう。

東の城壁に着くと、ちょうど兵士が城壁を開けるところで、他の町に向かうのである。荷馬車や行商人がたむろして開門を待っていた。

その中に俺の目を引くおかしな集団が居た。

てんでバラバラな鎧やローブを身に着けたそいつらは、弓や剣を背中に背負っている者もいれば、人の握りこぶし程の青いガラス球をはめ込んだ杖を持つ者もいて、明らかに周りとは纏っている雰囲気が違う。

門番や城の兵士であれば、白地のマントと左胸に紋章が刻まれた鎧をした格好のはずだが、そういうったものもない。

興味がわいてじろじろ見ていると、向こうも気づいたのか、こちらを見てきたので慌てて目をそらす。下手にケンカになってリア充の二の舞になるのははごめんだ。

もし、俺が浅野だったならば、目があった瞬間に挨拶して取り入って、彼らからいろいろ話を聞けるんだろうな。それで持っているコインと引き換えに食事も手に入れてたのかもしれない。そう考えると、つくづく俺のコミュ障ぶりが嫌になってくる。

俺がそんなせせこましい事で悩んでいるうちに、ついに門が開かれ、彼らは俺にそれ以上興味を持つことなく外に出て行った。

俺は、荷馬車や商人たちに先に行かせ、一番最後に付いて行き、川に差し掛かったところで橋の下に降りた。

川はそれほど大きくなかったが、ところどころ、水が深く緑色に見えるところがあり、中に入るのは危険な気がしてやめた。俺は小学校から体育が2で泳げないのだ。そんな訳で、ひざ下ほどの深さのところには10センチ程の小魚の群れが居たので掬おうとするが、逃げられる。石を投げてもあたらないので止めた。

魚を諦めて、くるぶしほどの深さの所で石の裏に何かいないか探している。沢蟹が居た。

慌てて捕まえようとすると、沢蟹は俺を挑発するかのようにな左右に小刻みにステップしつつ逃げ回り、追い掛け回すと緑色の深い場所に逃げて行ってしまふ。

そいつを諦め、元の場所を探していると、また同じような沢蟹を2・3匹見つけたが、みんな似たような動きで挑発しつつ水が深い所に逃げていく。どうやら逃げるのに慣れていているらしい。それに挑発までするとは沢蟹の癖にある程度の知性があるみたいだ。甲殻類の分際で。

動き回り疲れた俺は、先に洗濯をすることにした。

まず、糞まみれのボクサーパンツをじゃぶじゃぶあらう。

洗剤がないのが残念だが、近くにあった石に汚れ部分を叩きつけながら洗うと、かなり綺麗になった。ついでに濡れたボクサーパンツで革ジャンの血を拭くと、内側のシミは残ったものの、血の匂いはほとんどなくなった。

パンツと同じようにジーンズも洗った。ジーンズを洗っているとき、川の中央で魚でも跳ねたのか、『ぱしゃん』と音がして大きな波紋が走った。俺は某漫画の奇妙な冒険を思い出して『深緑水色のオーバードライブwwww』などと呑気に一人でウケていた。

ジーンズとパンツを洗った俺は血だらけの布も洗うことにした。布はリア充を運べるだけあって結構デカイ。幅1M長さ2Mぐらいの大きさだ。

軍で使ってたのかボロボロでも丈夫で、新品なら結構高いと思うのだが、リア充を運んだ後、返そうとしたらそのままくれた。

ふあさつと広げて水に漬けると、血の跡が水を吸い込み、成分が溶けて薄い赤色の液が染み出てくる。手もみ洗いしようとするが、水深の浅い場所では石に布が引っかかり、うまく洗えない。何よりデカイし。

結局、膝ほどの水深の所で、川の流れに鯉のぼりの如く流す感じで布を伸ばし左右にフリフリ振って適当に洗うことにした。

あそーれ、ふーりふり。

ふーりふり。

そんな感じで半分遊んでいると、布が何かに挟まったのか、いきなりガチツとした手ごたえがあり、布がぴんと張った。なんじゃこりゃ。根がかりかよ。

引っこ抜くために思いっきり引っ張るが、びくともしねえ。

近くの大きな石に左足を掛け、体を45度に倒すようにして足を踏ん張り、持てる力をすべてつぎ込んで引っ張ると、ググツとゆっく

り動き始めた。一旦動き始めた後は普通に引つ張ればゆっくりながらも動くようになったので、そのままスローモーシヨンな動きで水深の浅い方へ移動。

布を見ずに、2メートルほど歩いたところで水深が浅くなったので布の方を振り向くと。

大型犬並みの大きさの、足が何十本もあるカニもどきが、シェパードの頭ほどの4つの鋏を使って布にしがみついてました。

「うわあああああ！」

叫び声をあげ、布を離し猛ダツシュで陸に上がる俺。後ろでは半分体を水の上に出したカニもどきがキシユキシユ鳴いてる。

そのまま置いてあったジーンズやパンツを手に取り、街道に上がり、橋の上から川を覗いてみると。

十匹以上という数のカニもどきが俺の居た浅瀬を囲んで水中で半円陣を組んでおり、そのうち一角では俺の洗っていた血だらけの布を取り合い、カニどもが争ってスタスタにしていた…

どう見ても、俺を捕食する気満々でした。本当にありがとござい
ました。

そうかー。さつき沢蟹たちが挑発しつつ水が深い所に逃げたのは、俺を襲わせるためだったのかー。いや、びっくりだわー。というか、あんな生き物がいるのがびっくりだわー。

しばらく橋の上から見続ける事2分。カニもどき達は布を切り刻んで食い終ると、再び半円陣を組んで獲物を待ち構えていた。こんな状態じゃ何もする気がしないので、俺はスゴスゴと城下町に戻った。

城下町に戻ると、俺は荷物を隠し、先ほどの飲食店に行ってみることにした。

ポケットには謎のコイン十枚。どれくらいの価値かはわからないけど、少なくとも軽食は取れるはずだろう。

飲食店に着くとオープンテラスには4・5人の客がおり、食事をしているのが見えた。どうやら営業しているようなので、店の入口から中に入ったところ、そこにいた青年に止められた。

「すみません、食事したいんですが…」

青年にビビりつつも、自己主張する俺。

「申し訳ありませんが、当店は現在満席です」

笑顔を崩さないが断固入店を拒否する青年。

どうやら俺を浮浪者と思ってるらしい。まさにその通りだけど。

「いや、お金はあるんですよ」

昨日ハイシーズに買った謎コインを見せるが、青年はそのコインを見ること。

「残念ですが、それだけのお金では『何も』買えませんよ」
そう冷笑してお帰りくださいと俺を礼儀正しく入口から追い払った。

今日も、城門から浅野は出てこなかった。

閉じた城門を見て俺は頭を抱える。

唯一の知り合いであるヘイシーズに土下座でもしてパンでも分けてもらおうかと思っただけど、門番は違う人に変わっていた。勇気を出してヘイシーズの事を聞いてみると、昨日問題を起こしたので配置換えされたらしい。

どうやら、さすがに事故とはいえ殺人は問題だったようだ。

この世界にもある程度の倫理観があることに安心するが、そのおかげで食事を得る最後の道が断られた。

食事を取ってない状態で昨日今日と動き回ったせいか、あまりの飢えに吐き気がこみ上げてくる。

これは早く浅野が出てこないともう死ぬかもしれん。

いや、浅野が出てきたところで浅野が金や食い物を持っている保証はないので同じか。

薄暗くなるに従い、何らかの動力で動いてるであろう大通りの街灯が淡い白い火を灯し始めた。

人通りが無くなってきた大通りにまた派手な服の娼婦がポツポツと

立ち始める。彼女らが一定間隔で設置された街灯の下に立つ光景はなんだかファッションショーのようで、この世界はなにかのイベント会場なのかとも思えてくる。

俺も女だったらあややって食い扶持稼げたのにな。

そう思ったが、俺のキモイ見た目は女になつたところで変わらずに誰も買わないと思ひ自嘲して笑う。あそこにいる娼婦たちでさえ、それなりに美しいにもかかわらず、今朝起きた時にまだ売れていない女性がちらほらいたのだ。それに比べればここにいた女性は浮浪者の前というハンデにもかかわらず、すぐに買われたのだからよほど売れっ子だったのだろう。

彼女の事を思い出していたら、道の向こうから来る彼女を見つけた。俺は彼女に場所を明け渡すために荷物を取った。そしてその場に立ちあがるうとしたが、空腹で力が入らず、その場でしりもちをついてしまった。

彼女は真っ直ぐに俺の方にやってくると、もたもたしてる俺の前にポンと何かを投げ出した。布に包まれた何かだった。

俺が彼女を見ると、彼女は口だけで微かに笑い、俺に背を向けてそこで客を待った。背が高く背筋がピンと伸びていてカッコよかった。茶色の髪をアップにまとめ、毅然としていて『私は何も恥ずかしい事をしていない』と言っているかのようだった。

俺が布の包みを開けると、中には黒いパンにサラダ。少しばかりの肉も入っていた。

驚いて彼女を見るが、モデルのように凜とした雰囲気の彼女に声を掛けられず、心の中で何度も何度も礼を言った。

彼女は30分もしないうちに中年の男に買われていった。
昨日と違い、でっぷり太った男だった。

俺は彼女が男と連れ立って歩いて行き、姿が見えなくなるのを待って、パンを食べた。

パンは最初は驚くほど硬かったけど、噛んでるうちに柔らかくなった。

無能な三十路ニートだけど自活を試みた(後書き)

無理ゲーだと燃えるタイプ

俺のステータス

??? (なんか回復したらしい)

持ち物

Eシャツ&パンツ ∴ 体力 + 1

Eスニーカー ∴ 敏捷 + 3

E革ジャン ∴ 防御 + 5

Eチノパン ∴ 体力 + 2

E革ベルト ∴ 魅力 + 1

謎コイン × 10

ジーンス ∴ 防御 + 3

ボクサーパンツ ∴ 腕力 + 1

バスケット&布

売れっ子娼婦だけどピンチに陥った／薄毛な三十路二一トだけどリンチ見た（前

後で文章の細かい描写とかを直すかも、いつもの事だけど。

三日目の夜半～4日目の未明

売れっ子娼婦だけどピンチに陥った／薄毛な三十路二一トだけどリンチ見た

いびきをかきながら私を優しく抱きしめる男の腕をそつと外すと、男を起こさないようにベットを抜け出す。立ち上がると途端にトロリと男との行為の残滓が漏れ出し、それが『つつつ』と太腿を伝いやや不快な気分になる。

私は高級そうな絨毯が敷き詰められた床にこぼさないようにやや内股気味に歩き、男の家に備え付けられている浴室に入ると、まだ温かい浴槽のお湯を手桶で汲み、自分の体を隅々まで洗い流す。

今夜の客は『当たり』の客だった。

娼館で囲われていた時からのなじみの客だが、私が娼館から放り出され街角に立つ様になった後も、私を探し出して買い続けている『太客』である。

一般的庶民の家にはこうした浴室はなく、共同浴場を使うカタライに入れたお湯を使って体を拭くぐらいの事が精いっぱいだ。しかし事務方の城勤めでかなりの地位にいると寝物語に話した男の家には浴室も用意されているし、造りがしっかりしているためか防音も完璧で、夜中でも周辺の住民を起こす気遣いをすることなく活動できる。

それに行為自体もタンパクだし、寂しがり屋なのだろう。性欲を満足させることより、私に仕事場で起きた出来事や人間関係などの取りとめのない話をする事を好んだり、優しく抱きしめて背中をさすられることを望んだりとただ甘えてくる事も、私が彼を『好いている』理由の一つだ。

もちろん男が支払う『破格の』報酬も魅力的ではあるけども。

浴室で体を洗い終え、寢室のソファの上に脱ぎ散らかしていた私の服をかき集めていると、男が目を覚ましてしまった。

「ん…行くのか…？」

私に手を伸ばし、寂しそうに男が問いかける。

「ごめんねえ、ちょっと気になることがあって…」

下着を着ながら、男が私を撫でられるようベットの枕元近くに腰かける。

途端に男は嬉しそうに大きな体を揺らして体を寄せてくる。

「行かないで欲しいな…」

彼は私を行かせまいとするかのように、腰に手を回してくる。

私はただ静かに、優しく笑いながら服を着る。

ねえ、街角に立つぐらいなら僕の愛人にならないか

初めて私を探しだした時と同じ言葉を彼は口にする。

こういう事を長く続ける気はないの

私もあの時と同じ言葉で彼に返答する。

そして見た目と違った彼の純粹さを思い出してズキリと少しだけ心が痛む。

着替えが終わり、立ち上がった私は彼の額にキスをしてお別れの挨拶をすませる。玄関に向かう途中に彼の『カギは気にしなくていいから』という声を背に受けながら私は扉に手を掛けた。

外に出るとまだ湿り気を帯びている私の肌を、寒い夜の風が撫でていった。

こんな寒い中でよく野宿なんかできるものだ。

私はここ数日、目にするようになった男の事を考え、そう思った。

初めて見かけた時、明らかにこの世界に来たばかりであるらしい地球の服装をしたその男は、仲間とでもはぐれたのか膝を抱えて一人で泣いていた。

その姿に私は気の毒だなとは思ったが、縄張りに居られると邪魔なので彼に話しかけて移動してもらった。彼は泣きながらも『ごめんなさい…』と呟いてどこかに歩いて行った。すごく悪い事をした気分になった。

次の日、まだ日が昇って間もないころ、客の家から帰る私は縄張りに座っている彼を見つけた。彼は城門を凝視しており、私に気付かなかった。どうやら、城から誰かが出てくるのを待っているらしいかった。

そして家に帰った私が昼ごろに市場に向かうと、彼は血だらけの死体を引きずって歩いていた。死体の格好も地球の服装で、彼の仲間の一人かもしれないと思った。そしてその前の日に彼を追い払った事を思い出して、彼の仲間を自分が殺したみたいですごく嫌な気分になった。

その日の夜、縄張りに行くと彼は血だらけの布にくるまって泣いていた。

私が入っている事に気づいて、場所を移動しようとしたので、『そこにいていいよ』とだけ言っておいた。顔を見ると、死にそうな顔をしていた。『食事もとってないのかな』と思った。

なので今日、仕事に出る前に余っていた食材をバスケットに詰めて彼に渡すことにした。初日に冷たくしてしまつたお詫びの気持ちだつた。

彼は渡した食事に喜んでいたようだったが、私の仕事の邪魔をしないように話しかけては来ず、食事も私がいなくなるまで手を付けなかつた。

私は彼をなぜか放っておけない気分になつてしまつていた。子供の頃、公園で纏わりついてきたネコにエサを与えたら、愛着がわいてしまつた。それに似た感情を持つてしまつた。

そしてあの客と一緒に寝ている間に彼の事を思い出し、彼が仲間を見つけるまで、食事の差し入れだけでも続けてあげようと思つた。

だから、私が再び縄張りに戻つたのは、彼に渡したバスケットを回収するため、それ以上の意味はなかつた。

シスたちはそうは思わなかつた。

彼女は北の高級住宅街を根城にする娼婦達のリーダー的な存在で、最初私が此処に来た時には、娼館から追い出された私の境遇に

同情して縄張りを融通してくれたり、危険な客を教えてくれたりなど、何かと面倒を見てくれた。街角で客を取ることは娼館と違って難しかったけど、彼女に教えられた通りに客を見定めている内に、コツをつかんだ。

すぐに私を見染めた客や娼館時代の客がポツポツつくようになり、私も彼女らに対して、感謝の気持ちから、客からもらった報酬以外の贈り物やデザートなどを分け合ったりするようになり、彼女らからはとても感謝された。彼女らの仲間になれたと思った。

でもそれは長く続かなかった。

きっかけはシスの馴染みだった輸送商会の若旦那が、私を買ったことから始まったと思う。その日はたまたまシスが休んでおり、彼女の普段の居場所にいた私を彼の出した新人の使いツ走りが連れて行ったのは、明らかに偶然が重なった結果だった。

それでもシスは若旦那が私を買ったことに対して、内心面白くない感情を抱いているようで、私に対してよそよそしくなった。

私は彼女に対して心の中で謝りつつ、仕事を続けた。

それからしばらく経って、シスや他の娼婦に客が付きにくくなっていく事に気付いた。

秋が深まり、寒くなってきているので客足も途絶えがちなせいだと思うのだが、彼女らにとっては、私が彼女らの馴染みを『奪っている』ように思えたらしい。

実際に私に乗り換えた客が居るといふ噂まで耳にした。

その内に顔を合わせるたびに敵意に満ちた目で見られるようになってた。シスと仲がいい娼婦などは、私が陰で何人も客を取っていないか明らかな探りを入れてくる程だった。

それからというものの、私は『一晩に客を一人だけ』取るとわざわざ遠回りして縄張りを避けて家に帰るようにした。仲間内で許されているのは一晩に2人だが、彼女らをこれ以上刺激したくなかった。

実入りが減った分は自分の値段を上げる事である程度補填できた。

シスも私が自制している事に気付いたのか、最近ではそれほど敵意を向けられることはなくなっていた

私は正直気が緩んでいたんだと思う。

バスケットを回収するため、大通りを北に進んでいった私がふと後ろを見ると、シスの腰巾着で有名な娼婦が私の後をついてきているのが分かった。

彼女も帰り道かなと思いつつ、そのまま歩いて行くと、城門の前のT字路で西側の大通りを塞ぐ様に3人の娼婦が並んで立っており、こちらをじっと見ていた。

それを見て急に怖くなった。

同時に私は彼女らの視線が放つ意味を明確に理解した。

シスは私を許してなんかいない。

さっさとバスケットを取ってここから移動しなきゃ。

そう思い、早足で大通りを東に曲がると、その十数メートル先にある私の縄張りの前に、よく見慣れた黒髪のショートヘアの女性が立ちはだかっていた。

私が恐怖で足を止めると、周りの娼婦の輪は狭まって来た。

シスは私を手招きして優しくそうに笑った。

っ加減にしなさいよっ！

まだ真夜中だった。

女の声で目を覚ました。

貰った飯を平らげた満足感と疲れから監視ポイントで惰眠をむさぼっていた俺。

怒鳴りつけるような声に危険を感じ、身じろぎもせずには辺りを窺うと、俺の居るところから5メートルほど離れた大通りの真ん中で人が集まっており、何か揉めているのが分かった。

注意深く見ると揉めているのは数人の娼婦だった。

どうやら5・6人で一人の娼婦を囲んでいるらしく、その真ん中の娼婦に向かって。

「アンタねえ、売れてるからって一日に何人も客取られたらこっちが困んのよ！」

「ルールってものがあるでしょ。ルールってものが！」

などと集団で詰め寄っている。

糾弾されているその娼婦は、周りの娼婦に怯えているのか小さな声で、

『あたしはただ…』

『…に來ただけで…』

などポソポソ呟いているがその気弱な様子が集団を更にイラつかせているようで、声を出すたびに彼女への罵倒は強くなっていく。

しばらく聞き耳を立てて状況を推測するに、彼女が客を総取り状態だったため、この所お茶引きが続いた娼婦たちがキレたらしい。水商売の話によくあるNo.1へのやつかみと言ったところだろう。

この世界の女の嫉妬も元居た世界と似たり寄ったりで恐ろしいようだ。

それにしても、そこまで人気が出る娼婦ってどんななんだろうと思い、街灯の薄明かりに照らし出されている彼女の顔を見ると、なんと俺にさっき飯をくれた娼婦だった。

…そう言えばここは彼女の縄張りだったな…

可哀そうだなとは思うが、娼婦にも娼婦の暗黙の了解と言うものがあるので仕方ないかと思っただ。昔から娼婦と言うのは下賤な職だと思われているため、世間の風当たりが強く、互いに協力しなければ生きていけないため、ルールを破るものはリンチされる事もあったらしい。自由競争に慣れた現代人からすると、理不尽な気がしないでもないが、どんな娼婦だって生活が懸かっており生きるために必死なのだ。客を分け合うという暗黙の了解によって彼女らのセーフティネットは守られているのだ。

そう俺が娼婦のコミュニティについて考察している間にも、娼婦た

ちの彼女への罵倒は一層激しさを増していった。

「大体ね、アンタ勝手にこっちに来て色々やってるけど迷惑なんだよね」

「元々は娼館で雇われてたのに、そこでも問題起こしちゃったんだって？」

「いるよねー。どこでも行く先々で問題起こすやつ。常識ないのかなー」

「キャハハハ、酷ーいｗｗｗｗ」

彼女は最初から明らかに争う意思がないが、娼婦たちは気が収まらないようで、延々と彼女を罵倒し続ける。

俺に飯をくれた時の彼女の毅然としていた雰囲気はすっかり無くなり、背筋も心なしが丸くなっており、下を向いてポソポソ『ごめんなさい』と言いつける姿は完全に苛められっこの体勢です。ライフはゼロ。言い訳もゼロ。もう無条件降伏状態…。

そんな彼女の様子にもかかわらず、ヒートアップした娼婦のリーダーであろう黒髪のショートヘアーが彼女を右手で突き飛ばすと、周りの娼婦も一斉に手を出し始めた。丸まって頭と顔を守る様に蹲る彼女。困んでフクロ口にする娼婦。もうすでに反撃するつもりもない女にそこまでするのはさすがにやり過ぎじゃないか？

その様子を見ていて思ったが、もしかして、俺の事もあって彼女が突き上げを食らっているのか？

飲食店で俺が入店を拒否されたように、本質的にはサービスマンと同じ客商売である娼婦にとって、居るだけで客が寄り付かなくなる浮浪者は何としても排除したいだろう。なので初日に俺が此処にいた時、彼女は俺に縄張りを主張して退かそうとしたし、実際、夜のこ

の大通りには俺の他に浮浪者はいない。そんな中、彼女は俺が此処にいるのを許してしまっていたし、彼女が俺に食事を渡して『餌付け』していたので、他の娼婦にとってみれば浮浪者を呼び寄せているかのように思えるだろう。そうでなければ、ここまで痛めつけられる謂れもない。

そう考えると、彼女に対して本当に申し訳ない気分になってきた。止めよう、助けようと思って立ち上がるうとして、リア充の事を思い出した。

感情に任せて、無謀な行動をして死んだリア充を思い出した。立ち上がるうとした気持ちだが、自分の中で急激に萎えるのが分かった。

何とか彼女を助けてやりたい。でも下手に俺が止めても彼女のこれからの立場が悪化するだろうし、何より運動不足ヒキニートだった俺の腕力では娼婦にも負けるだろう。

その内に、あいつらも飽きてやめると。別に殺されるわけじゃない。そこまでやらないはず。俺が行ったら逆に迷惑になるし。俺は弱いから助けられないし。

頭の中では、言い訳が渦を巻いている。

俺の目の前で彼女は丸まってただ耐えている。

言い訳もせず、手も出さずに、身を守ってただただ耐えている。

俺は彼女から隠れるかのように寝返りを打ち、彼女に背を向ける。靴先が足元に置いていたバスケットに当たってバスケットはからんと音を立てて転がった。

中身がカラのバスケットは小気味いい澄んだ音を立てた。

俺が見る景色の視点が急に高くなった。
何してるんだ、どうするつもりなんだ？
急に立ち上がった俺に俺が問いかける。
力じゃ敵わないし、俺は一人だぞと問いかける。
力以外に何かできるだと俺は俺に反論する。
キモイだけが取り柄のお前には何にもできねーよと俺も反論する。

キモイだけが取り柄とかゆーな！
そう俺は俺の顔面に右こぶしを叩きつける。
吹き出す鼻血。のけぞる俺。

自分の中の何かに踏ん切りをつけて
開き直った俺は来ていた革ジャンをその場に投げ捨て
真っ白な肌着とチノパンだけになり、娼婦の集団に向け歩き出した。

売れっ子娼婦だけどピンチに陥ったノ薄毛な三十路二一トだけどリンチ見た(後

禿^{ツル}の恩返し…

俺のステータス

??? (状態・鼻血)

持ち物

E シャツ&パンツ…体力+1

E スニーカー…敏捷+3

E チノパン…体力+2

E 革ベルト…魅力+1

謎コイン×10

革ジャン…防御+5

ジーンズ…防御+3

ボクサーパンツ…腕力+1

バスケット&布

無能な三十路二一トだけど、恋をした（前書き）

4日目の未明

無能な三十路二一トだけど、恋をした

怒りに満ちた男の剛腕が唸りをあげ、俺のみぞおちにクリーンヒットする。

そして数秒の沈黙の後、自らの胃液にまみれた冷たい石畳を顔面に押し当てる様に、俺はゆっくりと崩れ落ちた。

立ちふさがる男の向こうではリンチを受けていた茶髪の娼婦が数人の人影に囲まれて座り込んでいる。

倒れ行く俺の目に一瞬彼女の顔が映り、その悲しそうな表情にっられて、俺は興奮して頭に上った血がゆっくりと引いてゆくを感じた。

男は倒れた俺を無視し、彼女に近づくと手を取り、ゆっくりと立ち上がらせる。

俺が始めた彼女を助けるための戦いは、結局、俺が地面に倒れ伏すことで一応の決着を見たのであった。

〜何かが吹っ切れた後についての俺の回想〜

あれから、娼婦の集団に立ち向かったカッコいい俺。

相手は5人。こっちは2人。しかもその内一人は戦意喪失中。まるで本能寺の信長を助けようとする森蘭丸ぐらいの絶望的状况だ。

そんな完全に勝ち目がない戦いに臨んだ俺の狙いは、黒髪シヨート。敵のリーダーを叩いて指揮系統を潰しせめて茶髪だけでも逃がそうという作戦だ。

とりあえず奇襲して相手を混乱させようと考えた俺は、いきなり黒

髪ショートを背後から羽交い絞めすると、全力で引っぱって茶髪から引き剥がそうとした。結果は力及ばずほとんど動かせなかったものの、『ひゃいん!』と奇声を上げて黒髪ショートは茶髪への暴行を停止。

振り返る様にこちらを見て、自分が鼻血を垂れ流した浮浪者に抱き着かれています事を理解すると、俺の見た目がよほどキモかったんだろうな。全力で暴れ始めた。

必死に暴れる彼女を全力でヘアヘア息切れしながら押さえつけていると、周りの娼婦も俺に気が付いて茶髪への暴行を止めた。こいつらに一気にこられるとそれだけで詰む。これはヤバい…が、あいつらは俺を見てるだけで何かしようとする気配はまるでねえ。どうやら人の指示がないと動けない指示待ち族らしい。

これはチャンスだと思い、そのまま状況が把握できず、呆けて俺を見る彼女らが手が出せないよう、体を黒髪ショートに密着させて彼女を押さえつける内に、俺の手が彼女の豊かな双丘に『偶然』タッチしてしまった。これを読んでいる女性読者に見れば『そんなの狙ってやってんでしょ。マジ最低…』と思うんだろう。しかし、これはホントに偶然だった。信じてほしい。

俺はその時の『むにっ』とした手触りが気になり、知的好奇心をくすぐられ、2・3度さらにタッチして感触を確認する事にした。これは先ほどと違い意識的な行為であるが、あくまで感触を確認するだけの知的で簡単な作業である。

下心は決してなかった。だから女性読者は俺をゴミの様に見ないで頂きたい。

感想としては

『うひゃあああああ、柔らけえええええ』

女の胸ってこんなに柔らかいの？』
といった所だったろうか。

俺は感動した。

中学のマイムマイム以降、久しぶりに触れた女性の体の柔らかさに、そしてどうせ負けてボコボコにされるならと、髪の毛の匂いを嗅ぎながら彼女の体の前でクロスした両手で胸を揉みほぐすセクハラ攻撃を敢行すると、黒髪シヨートは『嫌ああああ！』と嫌がった。それはもう盛大に嫌がった。

その嫌がり方にさらに俺は興奮。胸のドキドキもクライマックスに達し、揉む速度も当社比120%ほどに上昇した。正直に言つと、心なしか俺の体も、ちよつと『おっき』していたと思う。ちなみにクンカクンカしたシヨートな黒髪はいい匂いだった。

そうやって後ろから抱きしめる様に揉み続けていると、口では嫌がる黒髪シヨートだったが、体は俺のテクニクにメロメロになってたんだろくな。俺に肘鉄を加えようとぶんぶん振り回していた手も、胸を抑えるような可憐なしぐさになり、抵抗を弱めると同時に体を前かがみにして態勢を崩し始める。

その姿はまるで恥じらう乙女。マジ乙女www
おっさんに後ろから抱き付かれてるけどwww

彼女の態勢の崩れを感じた俺は、ついでだからこの柔らかい胸に顔を埋めてやろうと、その場に押し倒すべく奮起したが、それを敏感に察知した黒髪シヨートは必死で耐える。俺も全力を尽くしたが、惜しい事に力が足りず、ジタバタしてる間に我に返った他の娼婦に引き剥がされ、地面に突き飛ばされた。

黒髪シヨートは俺のテクニクで明らかに感じてたのに…今考えても空気の読めない奴らだと思つ…

とっ捕まった。

どうやら、俺が茶髪を暴行したのだと思っっているらしい。おそらく上半身肌着に鼻血を出している見た目が原因だろう。これは誤解を解かねばと思い。

「いえ違います、茶髪は違う人がやって、僕は黒髪ショートが本命です」

黒髪ショートたんへの興奮冷めやらぬ中、俺は紳士的にそう説明した。でもなぜか理解されずに、おととい井戸で俺を追い払ったゴツイ男に強烈なボディブローを貰うハメになった…

俺はそのまま兵士の詰所に連れてかれそうになった。

詰所って事は警察みたいな感じだろうか？

てことは牢屋に入れられる？牢屋と言えば城の中だよな。

そう思い、結果的に城の中に入れるかもと地面に転がりつつも心の中で喜んだ。

頭の中では取らぬ狸の皮算用。

『ひよっとしたら飯も食えるかもウハウハ』

『日本でも食えなくなったら刑務所入ればいいんだ』

『俺はなんて頭がいいんだ』

などと考え、予想外な方法での現状打破に俺は喜んだ。

そしてキラキラと期待するような目でゴツ男（俺を殴った奴）を見ると、薄気味悪そうに視線を逸らされたが、ゴツ男は期待に違わず

詰所に連れて行こうと俺を引きずりあげる。

そんな俺の期待に反して、なぜか茶髪が俺を同居人ですと説明した。どうしようかと思っただけど、茶髪と仲良くなつとけば、黒髪シヨートたんとまた会えるかもと思って否定しなかった。結局すったもんだの拳句解放された。

俺は茶髪のケガが心配だったが、碌に反撃せず防御に徹したのが幸いしたのか腕や足に青あざがある程度の軽傷で済んだらしい。住民が帰っていった後で心配する俺に今まで見たこともない顔で優しく笑って『大丈夫だから』と一言だけ言って、彼女は俺の手を取り歩き出す。

黒髪シヨートたんとその取り巻き達は俺が近づくだけで逃げたのに、俺の手をためらいなく握ってくれる茶髪は女神。マジ女神。さつき黒髪シヨートが本命って言うてごめんなさい。

でも、やっぱり俺の嫁は黒髪シヨートたんだ。

今でもこの手に思い出すのは今繋いでいる茶髪の柔らかな手ではなく、

シヨートたんの『たゆんたゆん』の豊かな双丘の手触りだ。

いつか君を迎えに行くよ。

そう思う俺は脳内で新しい力の芽生えを感じるのだった。

無能な三十路二一トだけど、恋をした(後書き)

スキル【不快様相】を手に入れました

俺のステータス

??? (状態・軽傷)

スキル

??? (脳内でなんか聞こえた。どうやらスキルがあるらしい)

持ち物

E シャツ&パンツ ∴ 体力 +1

E スニーカー ∴ 敏捷 +3

E チノパン ∴ 体力 +2

E 革ベルト ∴ 魅力 +1

謎コイン × 10

革ジャン ∴ 防御 +5

ジーンズ ∴ 防御 +3

ボクサーパンツ ∴ 腕力 +1

バスケット&布

無能な三十路ニートだけどようやくチュートリアル来た(前書き)

前回のあらすじ

黒髪シヨートをもみもみで『たゆんたゆん』

茶髪は女神だった。

4日目の未明

無能な三十路ニートだけどようやくチュートリアル来た

「それで、この変なの連れ帰ってきたのかい？」

茶髪の女神が連れ帰った俺を見て、女は言った。

180は楽に超えていそうな長身と、腰まである長くうねった黒髪を無造作に垂らした姿は茶髪に負けず劣らず美しいが、この世界には珍しい黒いスラックスに白いワイシャツを着ているため、ファンタジーの世界の住人と言うよりはまるで勝気なハリウッド女優のような雰囲気だ。

「だってあのまま放っておけなかったから」

「アンタも他人に情け掛ける程の余裕ある訳じゃないだろうにねエ」「ちよつと置いとくだけならいいでしょ、ルネには迷惑かけないって約束する」

「まア、アンタがこいつの分まで食い扶持稼ぐならそれでもいいさ」

そう言っただけで彼女は俺の方を振り向き、ポンとタオルを渡し、『風呂湧いてるから入ってきな』と廊下にあるドアを示す。

俺は、言われた通りに浴室に入るとまだ痛む体を洗い始めた。

強烈なボディブローをくらった腹は、そのそばを洗うだけでまだズキズキする。それが嫌で先に顔を洗うと、固まった鼻血がパリパリと剥がれ落ちていった。

ここは東門のすぐそばにある結構立派な4階建ての建物の一室。先ほどリンチされていた茶髪の住処らしい。

「それで、アンタは多分、地球から来たんだろ」
風呂から出ると、俺と入れ替わりに茶髪が風呂に入っけいき（汚れ果てた俺の後にも関わらずだ！まさに女神！）、俺はそのまま応接間に連れて行かれ、茶髪がルネと呼んだ大女に尋問を受けていた。座らされて即、地球と言う単語が出てきて驚いたが、大女の服装から見ても、どうやら地球の存在や文化を知っているようだ。

「はあ、多分そうです…」

「多分ッて、なんの説明も受けてないのかい？」

言われて、コクコク頷く俺。さつきから気分はヤクザの姐さんに従うチンピラ。

それを見て大女はハア〜とため息をつき、『なんかア運営がおかしくなっけそうだとは思っけたけど、ここまではねエ』と呟く。

運営っけことはやっけぱりあのゲームが原因だっけたのか？

っけつか、運営っけ俺や浅野じゃね？

そう思っけ、俺が地球でゲームの運営に参加してっけたことを大女に伝えたが、大女はそっけちの運営じゃないとかぶりを振っけて説明し始めた。

アンタがやってたゲームって『神大陸周遊記』って名前だろ？
それ、実はアタシ等が作ったプログラムが入ってるのさ。
いやア、シンガポールの会社とかは関係なしに。

アタシ等がこっちで作ったプログラムさ。

厳密に言えばシンガポールの組織もアタシ等の仲間がトップだから、

関係あるツチャ関係あるけどね。

まアそれは置いといてだ。

プログラムの話だったかね？

そのプログラムなんだが、普段は動かないようにしてあるんだが…

…なんて言うのかね。トールの木馬？

ん、ああトロイかい、トロイの木馬って言うらしいね。アンタ等は。

そういう感じでこっちの世界から起動する事が出来んのさ。
特定の個人を選んでね。

で、その特定の個人の選び方なんだが…

説明する前に、アンタ、こっちの世界来てどう思った？

遠慮しなくていいから言うてごらんよ。怒りゃしないからさ。

危険？あはは確かに危険かもねエ。アンタ等には。

でも、もつと他にあるだろ？

ん、ああそう。いいこと言った。

技術が遅れて、まるで中世の時代みたいだと思つたろ。

町には単純な道具しかないし、機械なんてほとんど見ないだろ
うしね。

その割に、夜に街灯が灯つたりとちぐはぐしてるのに気づくと
は、

アンタ見た目より頭いいね。

こっちの技術が進んでたり遅れてたりして見えるってのは要するにね、

単純に技師が足りないのさ。

ここまで言えばわかるかね。

あのプログラムに組まれているのは、

ゲームをする人間の脳内の知識やスキルを調べる事と

それを固定データ化して精神ごとこっちに持つてくる事さ。

肝心のどんな人間が選ばれるかは、

あたしも下っ端だから、よく分かんないけどね。

少なくとも、地球側にはれない様に必要な人間を選んだ後は、

そいつとうまくコンタクトを取ってから

同意を得てこっちに連れてくるって約束の筈だったんだけどね

エ。

いろいろ理由があつてここの領主にシステムの使用権与えたら
どうも碌なことしていない様でさ。

「ろくな事をしていないって、どう言う事っすか？」

自分の身に関係あるような気がして、つい口をはさむ。

しかも何となくチンピラ口調で。

「いやア、大した事じゃないんだけどね。ここ以外の各地でどうも

地球から来た技師たちが売り出されてるって話なのさ」

まア、平たく言えば奴隷だよ。

そう言つて、目の前の大女は口角をあげるだけの社交的なだけの笑顔を作る。

奴隷

一瞬、俺がこの世界に初めて来た時に見た地下室の光景を思い出した。

あの薄暗いじめじめした部屋の中には浅野を含め数十人の人がいたが、彼らは今どうなっているんだろうか。

ん、なんだい？

奴隷になツたらどうなるのか知りたいのかい？

そうだねエ…それこそ千差万別さ。

アシャー ज्या 領内なんかだと科学技術が遅れてる事もあつてか知識ある人間はそれなりの待遇で迎えられているけど、

私の居たロチエルナの街じゃあ技師も溢れてて消耗品扱いだったしねエ。

まあ、そこ治めてる神サマが人間嫌いだしねエ。

神が居るのか。

しかも人間嫌いの神様が治める町があるとか、なんというかさすがファンタジーだな…

ひょっとして住民も獣人やモンスターばかりだったして。

ネコミミ獣人やリアルバーニールをモミモミ…じゃないモフモフできるんですね。股間、もとい胸がアツくなるな。

そう考えて、一人ニマニマしていると、大女はこちらを『大丈夫かなこいつ』という目で見ていたので慌てて真面目な顔を取り繕う。

そんで、なんの話だっけ？

奴隷が売り出されてる話？

ああ、そうそう。

各地で地球の出身らしき奴隷が売られているって言う話を聞いて、

うちの神様がアタシ等を調査に向かわせたのさ。

一応、地球の管理はうちの神様の領分だからねエ。

まあ、調査と言ってもシステム使っている何力所かの街に赴いて、

おかしな事してないか探るだけなんだけどね。

ちようどアタシが此処に来たのが1年ほど前で、

その時に見つけたのがアニヤーナ達さ。

大女はそういうと浴室の方を示すように軽く顔を向ける。

浴室では俺と入れ替わりに入って行った女神な茶髪が体を洗っているのかザブザブと水音がしている。どうやら、茶髪の名前はアニヤーナというらしい。

そのまま話を聞いてまとめた所によると、

この町に来たばかりの大女が、手始めに奴隷市に行くと一般人に紛れて売りに出される茶髪を発見。見た感じ何か感じるものがあったので、即金で購入して話を聞いてみた所、果たして彼女は地球の出身で、元はシンガポールの会社に勤務する一般人だったらしい。

ゲームのテスターとして配属されていたのだが、仕事中に強制的にこっちの世界に飛ばされて来たらしく、なんの説明もなしに城に召喚されたが、こちらで求められるスキルを持っておらず、しばらく城で『教育された』後に売り飛ばされたそうさ。

以来、自分達を大女から『買い戻す』ために働いているらしい。

「まあ、ここでの仕事が終わるまでに全額払えなかつたら、奴隷市

で売り飛ばすだけだからアタシはどっちでも構わないんだけどねエ」
そう言うと大女は『あんたは逃げてきたのかい?』と聞いてきたが、
『呼ばれてすぐ、いきなり城外に捨てられました』と状況を交えて
説明すると、大女は初めて楽しそうに笑った。

この様子からすると、やはり俺の扱いは異常だったらしい。
くそう…何でおれだけ…と思って頭を抱えていると、笑い転げてい
た大女が説明してくれる。

「おそらくは…分析スキル持ちのチェックで役立つスキルがなかっ
たんだろうね」

「…つまり俺が無能って事っすか?」

「そう言う事だよ」

無能だったら捨てずに帰してくれればよかったのに。

俺なんか呼んでもニートだし。職歴ないし。理系知識0だし。

そもそも何で召喚するんだよ。

ドラ エで言ったら即戦力にスライムとか仲間にする感じだぞ。

初めての召喚練習かよ。

コレ、ひよっとして浅野に巻き込まれただけじゃねえの?

あいつ商社勤務で技術なさそうだけど、東南アジアでプラント開発
とかしてたし。

というか、作った関係者いるなら帰してもらえるんじゃない?

「コレ、どうやって帰るんすか。」

ここ、ゲームの世界なんすよね と続けて聞く。

すると大女は目を丸くして口だけの笑顔を作ると、こちらを向いた

ままた黙ってしまった。

「ちょwww誤魔化さないでほしいっスwww」
沈黙に不安を感じ、女に発言を求める俺。
え、なにそれ。「冗談だよな。冗談って言ってよね。」

「えっと、まずここがゲームの中かって話だけど、ここは現実さ。」

「現実っスか？スキルとか言ってたっスよね？」

「まあ、それは後で説明するよ」

そう言っただけは言葉を区切ると、説明を続けた。

「もう一つ、帰るって言ったけど、あのゲームに設定したプログラムの目的は技師を連れてくることだろう？だからこっちに連れてくるのはアンタ等の精神と知識、魂だけだねエ。肉体とか物理的なものはこっちで再構築してるわけさ。」

え…それって、つまり俺って地球では…

「多分、倒れて今頃は腐ってんじゃないのかね」
そう言っただけは女はアハハと面白そうに笑った。

無能な三十路ニートだけどようやくチュートリアル来た(後書き)

次回予告:無能な三十路ニートだけどスキル買ったwww

俺のステータス

??? (状態・軽傷)

スキル

??? (多分無能らしいぜ...)

持ち物

Eスニーカー ... 敏捷+3

E革ジャン ... 防御+5

Eジーンズ ... 防御+3

Eボクサーパンツ ... 腕力+1

E革ベルト ... 魅力+1

謎コイン×10

チノパン ... 体力+2

バスケット&布 ... アニヤーナに返しました

パンツ ... 三日履いていた汚れがひどくてアニヤが捨てました

シャツ ... 着てますが単品で補正効果出ませんでした

無能な三十路二トだけどスキル買ったったWWW(前書き)

前回のあらすじ

女神についてきたら悪魔みたいな大女が居た

あとなんか感想貰って、ガイアがビビった。

4日目

無能な三十路二一トだけどスキル買ったつたWWW

「アタシはルネヴェエラ・ハニヤ・ロチエルナ。呼び方はルネだろうが、ルハニヤだろうが何でもいいさ」

そう言えば、名前も尋ねていなかったなと思い、大女に尋ねたところ、どうでもいいとでも言う様にそっけなく言われた。

とりあえず、人に名前を聞く前に、こちらも自己紹介をと思い自分の名前を名乗ったのだが、ルネヴェエラ^{ねえ}姐さんは『明らかに地球出身だと知れると、いいカモにされるから名前は変えた方がいいねえ』と言って俺にオーマという名をくれた。

大宮から語感を取ってオーミヤという名前でもいいと思ったのだが、男だからオーマにしたらしい。姐さんには当然に逆らえる気がしないので快く受諾する。

姐さんが名前をくれると言った時には、一瞬、中学時代に俺を苛めていたヤンキーカップルを思い出して、『キモミヤ』とか『かぶり黒子ポ』等の名前を覚悟したが、意外とネーミングセンスがまともだったので安心する。ちなみに最初のは中学1年のあだ名で、2番目は2年の修学旅行後のあだ名だ。

「姐さんのセンスが思ったよりマトモでよかったっす…」
思わず口にする俺。

「そうかい？」

「一瞬、禿げとかゴミみたいな意味を持つ名前にされるかと思ったっす」

「なんかア…アンタ、アタシを悪魔みたいに思っておいでじゃないかい？」

そう言っつて苦笑いするルネヴェラ。

最初の印象よりもずっと気さくな人なのかもしれないな。

初めて会ったばかりなのにこんなに俺が気楽に話せてるのも珍しい。

「いや、悪魔っつて言うよりは…悪魔の奥さんと言っつか…」

「ん〜何となく言いたいこたア、わかるけどねエwww」

「ルネは魔人だよ」

声のした方を振り返ると、廊下からひよこんと顔を出した10歳に満たない程の赤毛の女兒がトレーを手にテトテトと歩きながら部屋に入ってきた。

女兒はそのままこちらに歩いてくると、姐さんと俺の前にトレーに乗せて持ってきたお茶を置き、自分の分のお茶を握りしめながら、俺の横にちょこんと座る。初めて会う俺にまったく物怖じしておらず、『初めまして、エリーです』とだけ挨拶するしぐさは見た目よりも大人びて見える。

「うるさくして、起こしちゃったかね」

「ううん、もう日が昇ってきてるよ。いつも通りの時間。」

そう言っつて、女兒はトレーに乗っている堅そうな黒いパンをナイフで切り始めた。

そうこうしている内に、茶髪の女神が風呂から出てくると、女兒を手伝い朝食のサラダを小皿に取り分けていく。

それから俺たちは談笑しながら食事を取り、女神が痛めた体を休めるために寝室に行くまでの間、俺は久しぶりの団欒を楽しんだ。

「そつえば、スキルってなんなんスカ？」

黒パンにサラダを挟んでグツチャグツチャ噛みしめながら俺が尋ねる。

「一言で言えば、人の脳にある技能をモジュール化して固定化したものだね」

残していった黒パンをアニヤーナの皿から取りつつ、ルネは興味なさそうに答えた。

たとえば、アンタが釘を打つ時を考えてごらんよ。

左手で釘を持って、右手でハンマーを持つ。

そして左手は釘が動かない様に、真っ直ぐ安定するようにしてから

右手のハンマーを外さない様に釘の頭にだけ当てるだろう？

コレ、子供が最初にやると意識してそれぞれの動作しなきゃいけないけど、

慣れてくると何ともなしにできるようになるじゃないか。

それは釘を抑えてそれを打つ動作が一連の動きとして

脳内でモデルが構築されるからなんだよ。

でだ、何十年か前にうちの神様が人間の脳の構造をデータ化してね。

そういう技能の情報を蓄積していくうちに、人の脳に拡張領域つけて

そこに技能を書き込んだりできる様になったのさ。

へえ、ふんふんと聞いている内に、いつの間にか俺のパンまで姐さんに食われてしまった。それでもまだ足りない様に、姐さんはエリーに『もう少し頂戴』と催促。エリーは黒パンとナイフを取り、黒パンを切り分けると、俺と姐さんに『どうぞ』と手渡す。

そのままナイフを仕舞おうとしたエリーだったが、ふと何か思い立ったようで、余っていたオレンジのような果物をトレーから取ると、滑らかな手つきで皮を剥き、薄皮を加工してあつという間に造花を作って、切り取った果肉を周りに添えた。

「スキルを貰えば、こう言う事もできるよ」

『にはっ』と可愛らしく笑って渡された花はテレビで見たホテルの料理人が作るような精巧なクオリティであり、間違っても幼児にできるものではない。

「すごいな……」

素直に驚嘆する俺を見て気分が良くなったのか、さらに余った皮で葉っぱを作り始める。

「ルネに料理のスキル、買ってもらったんだ」

「何にもできないのは居てもらっても迷惑だからねエ」

嬉しそうに自慢するエリーと対照的に仏頂面のルネは呆れたようにしているが、そっけなさそうに言っても目は楽しそうにエリーを見ているあたり、ルネもエリーが可愛いのだろう。

俺がそう思っているのに薄々気づいたのか、

「エリーも地球出身でね、体を再構築する際にアンタ等は領域を作っているから改造処置もいらなかったしね」

と言いつつみたデレ方をしてそっぽを向く。

エリーはそんな姐さんを気にすることなく葉っぱを作り終わると、ちよつと照れた様子を見せながら俺に手渡してくる。どうやら褒めてほしいらしいので『ホント立派だわ』と声を掛け、葉っぱを受けとった。

「お兄ちゃんもスキル買えば、こういう事できるようになるよ」

「へえ、そうなのか」

「アニヤお姉ちゃんのお客さんの中には、地球人だったけどスキル買って魔獣をいっぱい狩ってる人もいるし。」

じゃあ、俺が剣術スキル買えば、明日から剣聖も夢じゃないのか。

並み居る強豪を努力0で撃破していくニート伝説の始まりだなww

「ただ、スキルがあっても能力が足りないとうまく使えないけど…」

能力か…まあ、頭で剣術覚えても体がついていかないと無意味って事か。

「それには、まずステータスとか調べないといけないねエ。エリーがやってくれる場所知ってるから、後で二人で行ってきな。」

はいよ。と声を出しつつ、俺と姐さんは争う様にエリーが作ったデ

ザートを食べた。

「はい、これで大丈夫です。それでは6番窓口でお呼びしますので、おかけになってお待ちください」

去り際に渡された番号札を持って、俺は部屋を後にすると、そのままロビーで待つエリーの元へと急ぎ足で歩いて行った。

ここは町の南西部にある大きな建物。

所謂、『ギルド』とかいう建物だ。

姐さんにやってこいと言われた、ステータスを調べるための手続きは書類の記入と脳の領域改造状態の確認だけなので、すぐに終わった。後は俺の情報を貰って帰るだけなので、ちよろいもんだ。

ロビーに戻ると、鎧姿に身を包んだ大男や、細やかなシルクっぽい生地の白いローブに身を包んだ女などの統一感のない面々が至る所にたむろしており、壁のポートに貼ってある白い張り紙を見ている者もいれば、受付の女性と話しながらまとめられたファイルをペラペラめくり、云々と悩んでいる者もいる。

気になってエリーにあいつらが何しているか聞いてみたが、彼らの目的は単純で、冒険者への依頼や任務を探しに来ているらしい。

壁際に貼ってある張り紙が1週間以内の依頼で、窓口では依頼の請

負の他、公的任務や長期の依頼の斡旋をするんだとか。
暇潰しにボードの張り紙を見てみたが

『求む、市場テント設営 月 日〜3日間 未経験者歓迎 時給制』
『害虫駆除しませんか。即日払。害虫処分自由。5テル以上保
障』

『薬剤販売員募集。要スキル【薬学】5・【調剤】5』

等と言った、どこかで見たことあるような内容がびっしりと貼られていた。

エリー曰く、表向きは『ギルド』とかいう名前らしいが、俺これ知ってるよ。

引き籠ってた時、似たようなところにカーチャンに連れてかれたことある。

いわゆる職業安定所（ハークワーク）だ。

ファンタジーの世界に行ったら、そこは労働派遣の国でした…っと。
夢がねえなあ…

しかも、多分日本と違って社会保障もなさそうだし。

これは働いたら負けかもわからんね。

そう思っただけで見ている俺の横ではエリーがボードを隅から隅までをチエックしている。

「エリーの働ける仕事も相変わらずないのです…これでは何時まで経ってもアニヤお姉ちゃんにおんぶに抱っこです…」
としよげて長椅子に戻って行った。

流石に10歳に満たないエリーに誰も仕事をすることを期待してないと思うのだが、本人は何か思うところがあるらしい。

俺とエリーがボードを見飽きてから、30分ほどだろうか。

二人して長椅子で指相撲をして遊んでいると、俺の番号札がようやく呼ばれたので6番窓口に向かう。窓口では中世ヨーロッパ風の服装を着たオバちゃんが白色のブレスレットを持って俺を待っていた。

「お待たせいたしました。こちらがスキルブレスレットになります。登録料として3テル頂きます。」

テルって言うのは、こちらの世界のお金で、俺が持っていた謎コインがテルとか言うらしい。レストランで端金って言われた謎コインだが、ルネ姐さんに聞いたところ、有名な国の硬貨らしく、テルトルテ法とかいう事実上の国際通貨だとか。ちなみに1テル＝10ドルぐらいの価値って言うから、大体1000円か。レストランに入れなかったのは高級レストランはドレスコードとかいうのがあるのか、俺の格好が駄目だったかららしい。ちなみに1トルテ＝10000テルぐらいらしいので1トルテは百万なんだったよ。高額すぎて神サマ連中の専用通貨みたいな扱いなんだとか。まあ、一般人が使うのは人生に一回あるかないかららしいから俺には関係ないっポイ。

そんで、スキルブレスレットとかいうのが、脳の拡張領域にアクセスして俺のステータスとか確認する機械らしく、窓口のオバちゃんにはペチャクチャと勿体つけて説明しているが、見た感じ簡単そうなので聞き流す。

ポッケから謎コインを3つ支払い、さっそくブレスレットを嵌めてカチカチ弄ると、空中に大学ノート程の緑の情報ボードが『ブンツ』と出現した。

ナニナニ…

? 状態確認? スキル詳細確認? 環境設定: e t c
と色々あるが、よくわからん。

エリーに『どれ選べばいい?』って聞くと、エリーは自分のプレスレットを弄り、ボードを出現させると? を選択。ボードは薄い水色に代わり、空中に情報が表示された。

【登録者】 エリー 【年齢】 8

【基本職】 屍役術士 【サブ職業】 家事手伝い

腕力 1 1 (貧弱)

体力 1 5 (貧弱)

器用さ 4 0 (普通)

敏捷 1 8 (貧弱)

知力 3 7 (やや弱い)

精神 2 2 (弱い)

愛情 2 5 (弱い)

魅力 6 0 (やや高い)

生命 4 (不変)

運 ??? (算定のための経験が不足しています)

スキル

【食料料理】 L V . 1 2 【屍役術】 L V . 3 【交渉術】 L V . 7

おお、なんかファンタジーっぽいで。
エリー8歳かよ。完全に幼女じゃん。

屍役ってなんだろうって思って聞いてみると、死者を操る魔法で、もともとエリーに備わってたそう。何ができるか聞いてみたが、Y E S / N O の文字が書いてある紙の上にコイン載せて死者に質問できるんだってよ。

「それって…コックリさん？」

「…キューピッドさんです…断じてキューピッドなのです…」

どうやらあまり突っ込まれたくないようなので、気分を変えて俺の情報を見てみる事にする。喜び勇んでワクテカしながら？を選択すると、エリーのボードよりやや青がかったボードが『ブンッ』と出現。エリーも興味津々で覗き込む。

【登録者】オーマ 【年齢】30

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者（痴漢）

腕力 23（弱い）

体力 20（弱い）

器用さ 10（貧弱）

敏捷 10（貧弱）

知力 64（やや高い）

精神 8（虚弱）

愛情 30（やや弱い）

魅力 18（貧弱）

生命 9（不変）

運 ???（算定のための経験が不足しています）

スキル

【高等教育】Lv・26 【不快様相】Lv・1

「……………ひでえな……………」

「…お兄ちゃん、エリーとあんまり変わらない…」

俺の情報を見たエリーと俺。

あんまり期待はしてなかったが、ここまでひどいとは思わなかった。せめてスキルが使えるスキルならと一縷の望みをかけて？スキル詳細確認を選択してみる。

【高等教育】

物事を理論立てる事で理解力を高める事が出来ます。同じ高等教育のスキルを持つ仲間との意思疎通が円滑化できます。

【不快様相】

性犯罪を犯すことで手に入れられます。女性を遠ざける事が出来ません。
性犯罪系サブ職業に就くための必須スキルです。

「両方とも死にスキルじゃねえか…」

「…お兄ちゃん…エリーよりどうしようもないね…」

やや高いとなつている知力があつても、ボードの求人情報見る限り、専門スキルがないと無意味っぽい。唯一期待できるのは？？となつてる運だけが、運が良かったらまず『異世界に呼び出されて捨てられる』ことはなさそうなので、こっちもダメっぽい。

「じゃあ、当初の予定通りスキル買うか…」

「安くていいのがあるといいね。」

そう呟いて俺たちは隣のスキル屋に向かうことにした。

「【剣道・黒帯】 80テルか…8万で黒帯…高いのか安いのか」
「柔道の黒帯は140テルだよ」
「【理系・鉄鋼】が15トルテ（1500万）だったり、値段のつけ方がいまいわからんな…」

俺たちはスキル屋に来ると、カウンターに並んで腰掛け、揃ってパラパラと備え付けのカタログをめくり、よさそうなスキルをそれぞれ探し始めた。周りでは俺達と同じ白いブレスレットを嵌めた奴らが『魔獣対策に剣術スキルと回避を極めるべき』とか『費用対効果で言えば、高くて理系知識を得て技師として働く方が…』、『レベルが低いと理系も死にスキルだから…Lv上がりにくいし』などありだこーだと議論を繰り返している。

聞き耳を立てながら、俺に使えそうなスキルを探すが、資金が圧倒的に足りねえ。持つてるのは7テルで、装備を整えること考えると3テルは残してえ。

よって、4テル（4000円）が俺のスキル予算だが。

【二刀流剣術】 200テル

【細剣】 100テル

【アーチェリー】 160テル

【石工】 500テル

【東洋家具職人】 1トルテ

ってどう考えても買えねえし。

おっこれよくね。【砂金採り】 3テル。金山と川が近くにないと駄

目そうだけど。

2テルで【鈍器術】ってあるけど、鈍器って言葉で【棍棒術】とか【槌術】じゃないのが気になるな…サスペンスドラマで鈍器って言うとか花瓶とか灰皿が凶器だしよ。

【料理】300テルねえ、ん？

ちよwww

エリーの持つてる【美食料理】、2トルテんだけどwww

『何にもできないのは居てもらっても迷惑だから』で2百万払うとかwww

ルネ姐さんが可愛くなってきたな。

あー俺にもなんか買ってくれねえかな。甘えてもおっさんだから無理か。

「エリーは何欲しいんだ？」

飽きてきたので、さっきからカタログのページを食い入るように見つめているエリーに声を掛ける。

「可愛い魔法」

此方を見ることなく答えるエリーのカatalogを覗くと、【火魔法】や【木遁】といったスキルがズラーと並んでいる。

魔法なんてあるのかよというところ、エリー曰くこちらの世界の住民は精神エネルギーを使って魔法を使えるんだとか。そういえば、昨日見た冒険者っぽい集団の中にガラス球のついた杖持った魔道士みたいの居たわ。

「屍役術ってあんまり可愛くねえもんな」

「杖を使う魔法が欲しいです」

エリーが見つめるカタログの挿絵には、いかにも魔法少女と言った

風情の可愛らしい少女がステッキから雷を出す姿が描かれている。よく考えれば、エリーはまだそういうアニメを見ていても可笑しくない位の年だ。それがファンタジーの世界に来て持つている魔法がコックリさんだったらシヨックだわな。俺だつて嫌になると思う。

安い魔法でも買ってやるうかと思つたが、一番安い日常生活用の【火魔法】でも100テル。戦闘用だとトルテ級がほとんどだ…

それでもペラペラとカタログを捲っていくと、安い魔法のページを発見。

【服のシミを取る魔法】、【本の折れたページをきれいにする魔法】など実用的な魔法が1〜10テルほどの値段でバーゲンセール状態。

「ここの2テルぐらいの奴なら買ってもいいぞ」

というと、エリーは嬉しそうに使えそうな魔法を探し始めた。

結局、俺はさつき見つけた【鈍器術】を買うことにした。

理由は他のスキルは全部生活上のスキルで、戦闘になつた時に使うスキルはこれしかなかつたからである。それに鈍器術なら花瓶とか灰皿を武器に動けるかもしれん。もし家に変質者が来て可愛いエリーを襲おうとしたら花瓶が武器になる。これは大きい。と思いたい。

ちなみにエリーはいろいろ迷つた挙句、【日光乾燥】という魔法を買つた。

これは元々は10テルのスキルで洗濯物に日光が当たつてる場合、その乾燥をちよびつと早める魔法らしい。エリーが杖が使える魔法

を欲しがっている事を知った受付の兄ちゃんがその可愛らしい姿に心を動かされて、内緒でサービスして5テルにしてくれたので、俺の持ち金を全部使って買ってやった。一応、杖を使って使える魔法らしくエリーは喜んでた。

「お兄ちゃんありがとう」

喜ぶエリーの顔を見て、俺に娘が居たらエリーぐらいの年かと思いつつ、俺はルネ姐さんの気分が分かった気がした。

無能な三十路ニートだけどスキル買ったったWWW(後書き)

家に変質者来たらって、言ってる本人のサブ職が…

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者(痴漢)

腕力 23(弱い)

・単純な筋力を表します。

体力 20(弱い)

・肉体の強度と状態異常への耐性を表します。

器用さ 10(貧弱)

・スキルの精度や製造業への親和性を表します。

敏捷 10(貧弱)

・単純な体の動きの速さを表します。

知力 64(やや高い)

・物事への理解力を表します。

精神 8(虚弱)

・心のゆるぎなさや魔力を表します。

愛情 30(やや弱い)

・物事への執着心を表します。

魅力 18(貧弱)

・身体的、精神的な魅力を表します。

生命 9(不変)

・生まれ持った生命エネルギーを表します。

運 ???(算定のための経験が不足しています)

・生まれ持った運です。

スキル

【高等教育】 L V ・ 2 6

【不快様相】 L V ・ 1

【鈍器術】 L V ・ 1

・鈍器の扱いが上手くなります。 これしか詳細説明なかった

持ち物

Eスニーカー …… 敏捷 + 3

E革ジャン …… 防御 + 5 (防御ってなんだろ?)

Eジーンズ …… 防御 + 3

Eボクサーパンツ …… 腕力 + 1

E革ベルト …… 魅力 + 1

チノパン …… 体力 + 2

ちょっとカニ殺しに行つてくるわ(前書き)

ニートは毎日が日曜日。

ちょっとカニ殺しに行ってくるわ

「ちょっとカニとってくるわ」

そう言って朝から家を出ようとした俺を麗しき女性陣はアホを見る目で見つめた。

「カニってタンバの事？あなたじゃあ無理だと思っただけど…」

「お兄ちゃん、頭おかしくなっちゃったの？」

明らかに心配顔なアニヤーナ。

キチ イを見る目で俺を見るエリー。

そんな二人とは対照的にいつも通り姐さんはどうでもよさげな態度。

「ほっときな。家でゴロゴロしてるよりはいいじゃないか」

俺を見るのをやめ、テーブルで新聞を読み続けている。

「だめよルネ！タンバなんて普通の男性でも大怪我するのに！」

「どうせ怪我するほどタンバに近寄れやしないさ」

「ビビりだもんね。お兄ちゃんは。」

そう言って、三人とも明らかに俺の事を軽く見てやがる。

まあ、それもこれも俺のステータスの低さと、ここ1週間近くの間
の俺の行動が原因なのだが…

俺がギルドで登録をした日から今日で10日目。

あの日から俺は、昼は城門前で浅野が出てくるのを待ち、夜は女神の送り迎えをすることになった。送り迎えでは、娼婦たちが女神に敵意のこもったまなざしを送るのは感じたものの、その後ろでむつつり座り込んでいた俺を見て彼女らは女神を無視。手を出してこようとはしなかった。そんな中、流石の売れっ子女神は、俺が後ろに居ても相変わらずの即売れ。俺はすぐ暇になり、女神の帰りまで夜の街を歩き回っていた。そして城門西側大通りの街灯の下で、黒髪ショートたんを発見。まさに運命の出会いだった。

俺は黒髪ショートたんを見つけると無言で近寄り、話しかけようとした。しかしいざ後ろに近寄るとかける言葉が浮かばない。「あ・う・う・う・う」と呟いている内にショートたんはこちらに気づき、逃げていってしまう……。

次の日も、また次の日も似たようなことをやっていたんだが、4日目に俺と女神が連れ立って歩いていると、ショートたんとその取り巻きがやってきて、遠巻きに女神に話があるからと言ってきた。しばらく俺から離れ、2人で話をしていたが、最初からなぜか和気あいあいとした雰囲気、まるで女友達同士のように楽しそうな感じ。どうやら仲直りしたらしい。

それはめでたい。

じゃあ俺も黒髪ショートたんとお友達から始めたいお。と近づこうとしたところ、女神は急いでこちらに來ると、『おねがい…帰って』と申し訳なさそうに言った。

……どうやらショートたんは女神に客を喰われる事より俺が近くに居る方がよっぽど嫌だったんだな…

ポッチには慣れてるが、それでも拒絶されるとやはり辛いものだ。

一人寂しく家に帰るうちに、なんだか城門の外で浅野を待っていても、浅野が俺を見た瞬間に嫌がられそうな気がして、その日から浅野を待つのもやめてしまった。

以来、エリーの買物の荷物持ちに行く以外には、家でグータラと寝て過ごしている。

ルネ姐さんには鬱陶しそうにされるが、エリーには遊び相手が出て喜ばれているのが救いか。

そんなエリーは俺の買ってやった魔法がとても気に入ったらしく、掃除道具にあつたはたきをステッキ代わりに【日光乾燥】を洗濯物にかけては喜んでいる。ちょびつと乾くのが早くなると言われた日光乾燥だが、連続で重ねがけしていれば効果も増すらしく、一生懸命魔法をかけ続けるエリーは、10日目で30分もあれば洗濯物が全部乾くようになってしまった。レベルも上がって一気に10になつてた上、精神も5ポイント上がって27になつたらしい。ルネ姐さんに聞いたが、人の魔法は才能と精神がモノを言うらしく、エリーはそういうのに恵まれてるそう。

エリー本人も将来は魔法使いになりたいらしく、家事の合間に俺と遊ぶ時には、魔法使いごっこをよくやりたがる。設定は俺が家に埃を撒き散らす悪の怪人で、エリーが正義の変身魔法少女。埃を撒き散らしながら逃げ惑う俺をはたきで叩き、最後に日光魔法で俺を乾燥させるとどめを刺して終わる。

それでびっくりしたんだが、【日光乾燥】って人にも効くんなんだな。

一昨日は遊びがエキサイトして5分ほどかけられたんだが、唇がパリパリになつたうえ、顔面が土気色になってたらしい。たまたま2階から降りてきたルネ姐さんが俺を見て驚愕。俺は慌てて担ぎ上げられ、風呂場の浴槽に叩き込まれた挙句、塩を溶かした水をしこたま飲まされた。

俺は楽しんで『ギャーwww』とか『死ぬようwww』とか言っていたけど、実際に脱水症状を起こしてたらしい。

結局、姐さんに遊びでの魔法の使用を禁止されて、エリーはすげえ落ち込んだ。

なんか安全な魔法を買ってやりたいが、俺もお金がない。

ギルド（ハロワ）でバイトでも探せばいいのだが、働きたくないでござるし。

なんかしてあげたいが、なんもできん。ニートの辛い所だ。

そんな中、昨日行った市場で俺は驚くべきものを発見した。

それは俺にこの世界の危険性を真っ先に教えてくれた恩師。

そう巨大な体に、犬の頭ほどの4つの缺と何十本という足を持つあの『カニもどき』先生との再会である。

久しぶりに会ったカニもどき先生。この前に見たときはやや緑がかつた体だったが、市場の先生は熱湯で真っ赤に茹っていた上に、その御身を3つに裂かれていた。売り子のオバちゃんに聞いてみた所、タンバとかいう魔物で、高級食材らしい。値段は1/3だけで10テル（1万）もした。

先生はカニの癖に足がすげえ多いので、見た目がゲジゲジみたいで

グロイ。

だから食えるのか疑問だったが、キラキラした瞳で見つめるエリーが物欲しそうな顔をしているのに気付いたのか、オバちゃんが少しだけ試食させてくれる事に。

大量にある足の内、小さい一本を『ぶちり』とちぎって殻を割り、身に塩を掛けた物を食ってみる。

その感想。

ほくほくと湯気を上げる先生はプリンプリンの触感でむっちゃ美味かった。

エリーもがつつく先生のジューシーな美味しさ。

あのルネ姐さんも好物で、ごく稀に一人で出かけていっては、どこからか先生を持ってくるのがエリーの楽しみなんだとか。

「もっと食べたいのです…」

そう言うエリーだが、ルネ姐さんは気分屋なのでいつ持ってくるかわからないらしく、それに一応エリーと女神は姐さんの奴隷なのでおねだりもしにくいんだと。

買おうにも俺らはそんな金ねえし。

…だったらコレ捕ってこればよくね？

と言う事で、冒頭に戻って

「ちょっとカニとってくるわ」

の俺の発言が飛び出したのである。

「無理して怪我をしないようにしてね」

「中途半端に怪我する位なら死んでくるんだよ。手当がめんどろいだからね」

「お兄ちゃん、もし死んだらエリーがお兄ちゃんの霊を毎日呼んであげるね」

俺がどうしてもカニを取ってくるつもりと知った女性陣は、三者三様に心配してくれた。

特にアニヤーナはなぜか俺の事を子ども扱いし、『絶対に行かない方がいい』、『無理しなくても、あたしが食べられる分は稼ぐから…』などと最後まで渋っていたが、『試しにやってみるだけで大丈夫だから』と言い貼る俺に最後は折れる形で送り出してくれた。

そうして道を行く俺の心はウキウキ。

自然と足取りも軽く、顔もニヤニヤ笑っている。

一匹20テル(2万)以上の高級食材？

あそこ(橋の下)には大量にいたおwww

女神たちには悪いけど、これで大金持ちだおwww

ブヒユフユヒユwww笑いが止まらんおwww

汚い俺の考えが顔にも出てたのだろう。

通り過ぎる人々に気味悪がられながら、俺は家のそばの東門を通り、川に向かって街道をテックテックと歩いて行った。

ちょっとカニ殺しに行ってくるわ(後書き)

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者(痴漢)

腕力 23(弱い)

体力 20(弱い)

器用さ 10(貧弱)

敏捷 10(貧弱)

知力 64(やや高い)

精神 8(虚弱)

愛情 30(やや弱い)

魅力 18(貧弱)

生命 9(不変)

運 ???(算定のための経験が不足しています)

スキル

【高等教育】 LV・26

【不快様相】 LV・1

【鈍器術】 LV・1

持ち物

Eスニーカー ……敏捷+3

E革ジャン ……防御+5

Eチノパン ……体力+2

Eボクサーパンツ ……腕力+1

E革ベルト ……魅力+1

ジーンズ

∴ 防御 + 3

ちょっとエロトカゲ殺しにいつてくるわ

さて、東門を出て川を目指し歩く俺。目指す敵は大型犬並みの大きさの甲殻類である。

金に目がくらんだ勢いで出てきてしまったが、さすがに出掛けの姐さんの一言『死んで来い』で先生の危険性を思い出したので、作戦を立てる事にする。以前来た時の事を思い出してみると、先生は浅瀬を中心に、半円状を描いて布陣を引いていた。それに先生は緑っぱい甲羅をしているため、緑色になっている深い場所に隠れると、川岸からは光の反射の加減で先生の姿はステルス状態になっている。もし俺が不用意に近づいたら、いきなり先生に足を掴まれてその場にくぎ付け。その隙に他の先生方が殺到してズタズタにされるだろう。

この前の時には、あまりに空腹で力が出なく、沢蟹を無視して先に洗濯をしたことで偶然助かったのである。血だらけの布が俺の代わりに犠牲になったのだ。身代わり地蔵のようにズタズタにされたのだ。

このまま向かったらまず死ぬな。間違いなく。

そう思いくるりと踵を返して東門に戻る俺。目指すはルネ姐さんの家で過ごすうちに見つけたゴミ捨て場である。

東門付近のゴミ捨て場は姐さんの家から南にちょっと行ったところにある城壁の下で、そこには野菜の皮などの生ごみ、布や割れた

鍋の蓋などの資源ごみ、でかい廃材の粗大ごみの3種に分かれてごみが捨てられている。俺はゴミ捨て場にたどり着くと、生ごみ置き場を華麗にスルー。目指すは資源ごみと粗大ごみである。浮浪者時代なら生ごみに涙を流して喜んだのだろうが、今は武器を探しているのだ。

目当ての資源ごみ置き場に着くと、俺はがさごそとゴミを漁り始めた。うまくいけばフライパンなどがあるかもしれないと思ったのだが、残念なことにそんないい物はなかった。見つけたのは薄汚れてひどい匂い（ゲロか？）のする上着だけである。上着を引っ張ったら丈夫だったので確保しておく。

気を取り直して、廃材置き場に移動する。

こちらはさらに碌なものがなかった。あつたのは半分ほどが焼け焦げた戸棚や口が欠けた花瓶などで、武器になれそうなものはない。戸棚はつまみ部分があり、パカパカ開くタイプだったので、無事な方の扉を外せば30cm x 50cmほどの盾になりそう。とりあえず外して装備してみる。

…結論としては、つまみ部分が端っこなのでバランスが悪く、トングファアの棒の部分が板になった感じだ。しかも持つところを逆手に握ると小指から中指ぐらいの長さしかないので非常に使いづらいでもないよりマシなレベルだな。だから確保で。

あとは武器だ。本来だったら市場のそばの武器屋にある棘付のメイスのような立派な武器が欲しいのだが、そんな贅沢は言ってもらえない。あいつら普通に100テル（10万）以上する。市場の雑貨屋に置いてあった木刀でさえ、5テル（5千）だったのだ。ニートの俺に買えるわけない。だから廃材でなんとかするしかない。

そんで考えていると、廃材置き場の隅にどけておいた花瓶が目にと留まった。そういえば【鈍器術】で試したのは棍棒だけだったなと思つて、「冗談半分で試しに花瓶を振つてみる事にした。

まさかね、『家事手伝いは見た』とかの凶器じゃあるまいし、いくら鈍器でもスキル対象外だろww

そう思つてたのだが、やってみると俺の腰の入ったスイングでビュンビュン音を立てて振り回される花瓶。スイングがすげえキレてるおwwイケるじゃん！武器ゲットwwww

と調子こいて振り回していた所、花瓶を戸棚に当てて割つてしまった…。花瓶は耐久力に難があるな…。まあ割つてしまったのはしょうがない。むしろ本番で初めて割れて武器なしになるよりはよっぽどいい。

じゃあ、他になんかねえかなとキョロキョロ見ていると、道端に20cmほどの平たいがでこぼこの石を発見。これも対象になるか？と振つてみたらビュンビュンなったww。持ち方によっては片手で持てる分、花瓶より使いやすい。片手だとスイングのスピードは遅くなるけど。こいつは拾つた石（中）と名付けよう。

そんで、ふと思ひ立つて、スキルブレスレットをポチリ、装備ステータスを確認したところ、拾つた石（中）の攻撃力は22だった…市場の雑貨屋で試した木刀の攻撃力は18だったのにすげえなwwww木刀代金の5テル分儲けたわwwww

ついに武器もゲットしたので、ゴミ捨て場を引き上げ、東門に向かう。

城壁に沿ってポコポコ歩いて行くと、東門の城壁の陰に赤毛の子供が隠れるのが見えた。見覚えがある姿だったので近づいて行くと、やはりエリーだ。こちらに背を向けて座り込み、やり過ごすつもりらしい。

後ろから『エリー何やってんだ？』と話しかけると、エリーはビクツと体を震わせ、ゆっくりと此方を向く。顔はしょぼくれて、まるでイタズラを先生に見つかつた小学生のような様子にピンとくる。

ははーん。どうやらエリーは俺をつけていたらしい。

「エリー、俺の後つけてきたのか？」

なるべく優しい声色になる様に心がけていう。聞き分けのいい子供ってのは悪い事じゃなくても、なぜか罪悪感を抱くもんだからな俺なんかとくにそうだった。

エリーもそういうタイプの子供なのか全く反応しない。だんまりを決め込むようで、コミュ障の俺にはちょっと荷が重いが、相手は子供なので俺が拗ねる訳にもいかない。

『ルネ姐さんには出かけるって言ってきたのか？俺の事を心配してついできたのか？』と何とか喋らそうというる聞いてみる。

エリーはそれでもずっと黙っていたが、俺が『じゃあ一緒にいくか？』と聞いてみると嬉しそうに引つ付けてきた。まるで、置いてきぼりを食らつた犬が飼い主を見つけて喜ぶような甘えっぷりにちよつと驚く。俺、今までの人生でこんなに俺と一緒に居られる事で喜ばれたことなんかねえよ。

思えば、エリーは今まで友達もいなく、一人で家事やってたんだよな。それも1年前からだから7歳から。そのぐらいなら地球で幼稚園の友達とかもいそうなもんだが、エリーってどうも元はいいと

このお嬢ちゃんだったみたいで、礼儀正しいししっかりしてる。精神年齢だけなら俺と同じ…いや上って言うてもいいぐらいだ。多分地球でも同年代の子供との付き合いもあんまりなかったんじゃないかな…。

だからたった10日とはいえ、子供っぽくて自分と本気で遊んでくれる俺が友達に一番近かったのかもな。初めてできた友達に置いていかれた寂しさと心配なのが半分。後は自分もちょっと冒険してみたって気分が半分と言ったところだろう。

「まあ、離れた所に居てもらえば危なくはねえかな」

そう呟く俺は嬉しそうなエリーを連れて、東門を出て街道を歩いて行った。

橋の上を商品を積んだ荷馬車がごろごろと音をたてて通り過ぎていき、馬車を避け橋のたもとに居たエリーが橋の上に戻り、俺のバックアップを再開する。

川の中には俺。手にはさっき拾った上着を持ち、ひざ下ほどの深さの浅瀬に立っている。

「大丈夫だよ。まだ近づいてきてないよ」

先生の動きを俺に逐一報告するエリー！

橋の上からなら光の反射がないため、水中の先生の姿を目で確認できることを利用し、エリーが俺の安全に気を配り、その間に俺が先生を浅瀬におびき出す作戦だ。

俺の立てた作戦の流れは単純である。

この前の先生の動きから、どうやら先生は最初に獲物を捕まえると、獲物を切り刻もうとせずに仲間が来るまでしがみつくと習性がある気がした。なんでかつつと、最初に血だらけの布をつかんでいた先生は、俺が全力で引つ張って浅瀬に上げてそのまま何もしようと思わず、俺が布を離すと、深い場所に布を引きずり込んでから布をジョッキジョッキ切り裂いたからだ。つまり、最初から切ろうと思えば切れたのだが、切らずに引きずり込もうとしていたのだ。

これは多分、先生が群れで狩りをしているためだろう。一匹が獲物を捕まえている間に他の先生方が獲物を切り裂いて、みんなでおいしく食事会。そんな方法で狩りをしているようなのだ。

なのでこれを逆手に取るのが今回の作戦のキモだ。
以下心して聞くように。

まずエリーが上から先生達を見張り、俺が後ろからやられないようにする。

そして俺が先生を一匹、上着で釣る。

釣られる先生。バカだから上着をつかんだまま離さない。

そのまま浅瀬まで引きずられて、先生の苦手な半地上戦にもつれ込む。

エリーはそのまま他のカニもどきを警戒しつつ、橋の上から小石を投げる。

小石にビビる先生。逃げようと後ろを向く。所詮は甲殻類だし。そこをすかさず俺が拾った石（中）で後ろからぶん殴る。

大勝利！！！！

つまり先生との One on One を実現すれば大勝利になる。

うん、我ながら完璧すぎて非のつけどころのない作戦だな。
ではこれを『カニみそ大作戦』と名付ける！

「先生…あなたは強かった…
でもその強さは間違った強さだった…」

昔、地球でもサーベルタイガーやマンモスと言った大型の
獣がいた。

彼らはとても強かった。その牙は草食獣の衣を裂き、無敵の存
在だった。

彼らは大陸の覇者だった。どんな強い生き物も彼らの前には道
を譲った。

しかしそんな彼らに立ち向かう生物が現れた。

彼らは堅い衣を持っておらず、牙は肉食獣の肉を貫くこともで
きない。

彼らはただ、2足歩行するだけの脆弱な生き物だった。

そして月日は流れ 狩りとられ、絶滅したのは大型獣の方だ
った。

脆弱な生き物は牙や衣を持たない代わりに
獣よりはるかに優れた知性を持っていたのだ

「…お兄ちゃん、エリーには何言ってるかわかんないんだけど…」
「つまり、先生はバカだから死ぬんだおwww」

その言葉を合図に上着は川に放たれ、カニみそ大作戦は実行され

た。

「釣れないな……」

「まったく動きがないよ」

「ためしに動かしてみるか、あそーね。ふーりふりつと」

「反応ないね……」

あれから20分ほど上着を水に流しているが先生は全く反応しない。完璧に思われた『カニみそ大作戦』だが、いきなり最初で躓くことになった。とりあえず、俺は作戦を停止。橋の上のエリーと合流する。

エリーに濡れたチノパンを乾かしてもらいながら2人で考えた結果。この前の布は血だらけだったから釣れたんじゃないか？という話になった。

それからエリーと俺は川から離れ、近くの林に来た。目的は虫やネズミと言ったいわゆる餌を探しに来ている。生き物の血を上着に染み込ませ、先生を釣り上げるのだ。

なんで、捕まえる生き物は何でもいい。正直、ミミズでもいい。血が出るなら。だから俺は地面を木切れで掘っていたし、エリーは葉っぱの裏とかに虫でもいないか探してた。

そんな俺たちがガスガス、しゃらしゃらやっている、急にエリーが『ひゃっ』と声を上げた。何が起こったかと思つてそちらを見ると、エリーが20センチほどの恐竜を小さくしたようなトカゲ達に囲まれてた。

トカゲ達は後ろ足だけでびよんびよん飛び跳ねながらエリーを取り囲んでおり、エリーが逃げようとすると、そちらを塞ぐかのように数匹で壁を作って動きを止める。周囲一帯を歩き回って俺の方をチラリとみる奴もいたが、俺がぼけつと突っ立っているのを確認すると俺を無視してエリーの包囲に参加。俺を完全に部外者扱いです。

なんだこいつら、エリーを襲うつもりかよ。俺を置き物かと思つてるのか？あんまり舐めんなよ。

トカゲにエリーの保護者として見られてなかったのがショックだったのか、エリーが襲われそうなのがショックだったのか。奴らの行動は俺の怒りにイグニッション。

点火された怒りで顔を真っ赤にした俺は、石（中）を両手で握りしめると奴らに向かって猛ダッシュ。『ロリコン死ね！』と叫びながらエリーを取り囲むトカゲの中で一番デカイ奴にフルスイングすると、哀れトカゲは脳天を地面と石にサンドイッチ。『ピギツ』と声をあげて昇天した。

リーダーを亡くした上、いきなりの部外者乱入にパニくるエロト

カゲども。

『ごめんなさい』とでも言う様に、俺とエリーの間を開け、エリーを引き渡すそぶりを見せるが俺の怒りはそんなもので収まることはないのは明白。

俺の怒りはもう確定。

さらに石を振りかぶり、近くの2匹を続けて叩き潰す。

奴らは俺に恐れをなして逃げるが焦っているんだろ。中にはバク転する奴までいた。しかし俺は冷静に石を振りかぶると着地した瞬間に『芸なら他の所でやるんだな』と振り降ろす。バク転したエロトカゲの地面との距離を限りなく0にしてやった。

バク転野郎を叩き潰した俺が石を持ち上げるとほぼすべてのエロトカゲが逃げてしまっていたが、エリーの後ろに隠れる様にしているエロトカゲを一匹発見。

気が付かないふりをしてエリーに近づくと、最後の一匹も逃げる隙を与えずに石を振り降ろしてぐっちゃんこにしてやった。

最後の一匹を潰した瞬間、俺の頭の中で場違いなファンファーレが鳴り響いた。何事かと思い、スキルブレスレットで確認すると【鈍器術】のレベルが上がっていた。どうやら、【鈍器術】は魔物を倒すと経験値が入るらしい。レベルが上がって何か変わったかという、なんかスイングのキレが良くなった気がする……ぐらいかな。

他に何か変わってないかチェックすると、腕力が1ポイント上が

つてた。これは働きの評価されたようでも素直にうれしい。エリーもちよつとだけ俺を見直したようで、俺を見る目がキラキラしていた。実際はトカゲが俺を舐めすぎていただけなのだが、この際良しとしよう。

そんなこんなで先生のえさを手に入れた俺たちは、エロトカゲの死骸を回収すると、林を後にし、川に向かって歩き出したのである。

～魔物紹介～

アントン　　オーマ命名：エロトカゲ

2本足で立つトカゲ。移動はカンガルーの様に飛び跳ねて移動する。前足は発達しており、リスの様に物をつかんで食べる事もできる。知力は比較的たかく、仕込めば簡単な芸もするが、人に対する忠誠心が低くペットには向かない。町の周辺に徒党を組んで活動していることが多く、行商人や冒険者のおこぼれに味を占めて、ごく稀に芸をしてエサを貰う個体もいる。観察眼が鋭く、一人でいる子供や老人を集団で襲うケースもあるため定期的にギルドで駆除依頼が出る。初心者向き討伐任務対象として有名。素材は特にとれず、干し肉やペットのおやつとしてのジャーキーになる程度。

ちょっとエロトカゲ殺しにいつてくるわ(後書き)

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者(痴漢)

腕力	24 (弱い)
体力	20 (弱い)
器用さ	10 (貧弱)
敏捷	10 (貧弱)
知力	64 (やや高い)
精神	8 (虚弱)
愛情	30 (やや弱い)
魅力	18 (貧弱)
生命	9 (不変)
運	?? (算定のための経験が不足しています)

スキル

【高等教育】 LV・26

【不快感相】 LV・1

【鈍器術】 LV・2

持ち物

E 拾った石(中) ∴ 攻撃+22

E スニーカー ∴ 敏捷+3

E 革ジャン ∴ 防御+5

E チノパン ∴ 体力+2

E ボクサーパンツ ∴ 腕力+1

E 革ベルト ∴ 魅力+1

ジーンズ … 防御 + 3
戸棚の扉 … 防御 + 5
アントンの死骸 × 5
ゲロまみれの上着 (洗って干してある)

続・ちよつとカニ殺しに行つてくるわ(前書き)

終わるまで書いてたら長すぎたんで、
このパート分けてu pします。

続・ちよつとカニ殺しに行ってくるわ

川に戻った俺は、さつそく殺したエロトカゲの血を上着に塗りつける作業を開始した。上着はまだ生乾きで『べとつ』とした手触りだったが、川に流す時、血がすぐに流れてしまわない様に血を塗り込んでから乾かすので問題ない。そのまま塗りつける。

しかし、エロトカゲの血は固まりやすいのか、もうすでに傷口からは血が止まりかけており、傷口を指先でえぐるようにして塗り付けていると、手が血だらけになってしまった。傍から見ると、川岸で手を血だらけにした男が幼女と一緒に上着に血をつけているという、怪しさ満点な図。

「おい、おっさん何やってんの？」

さすがに目立つのか、たまたま橋の上を通りかかった若い冒険者の集団が俺達を見咎めて話しかけてきたので、『上着に血を塗ったくってカニもどき釣るんだ』と答えてやったら大笑いされた。

「ちょｗｗｗｗおっさん死ぬって。割とマジでｗｗｗｗ」

「バカじゃないの。タンバを上着で釣ろうとする人なんて、私初めて見たわ。」

「それにおっさん、見た所ろくな装備もないじゃん。俺らみたいな中堅だつてタンバなんて狩れねえのに、おっさんには無理だろｗｗｗｗ」

「だよねｗｗｗｗ」

「おじさんも僕らみたいにアントン狩って金稼いだ方がいいよお。楽な割に金になるからさあ」

まだ十代か二十歳になったばかりぐらいの彼らに悪気はないのだろうが、ひどい言われようだ。アントンと言うのが何かわからなかったが、聞くとエロトカゲの事らしい。ギルドの依頼を受けてから狩れば、結構な駆除代金が入るんだってよ。『マジかよ損したわ』と呟くと、若者たちは俺を初心者以下と判断したようで、明らかに俺を格下扱いして笑い始めた。

そのまま彼らの話を聞いていたが、ふと気づくと、エリーの機嫌が明らかに悪そう。どうやら若者たちが俺を笑っているのが癪に障ったらしい。

俺はまあ、自分がニートの屑だって分かってるし、プライドゼロじゃん。それに彼らの言い分ももともだし、悪気がないのがわかるから気にならないが、エリーには彼らに俺がバカにされてるように思ったのだろうな。そのうちに、エリーは彼らを見殺しして、無言でエロトカゲの血を上着に塗り付け始めた。

俺はさすがに幼女が手を血だらけにして上着に血を塗りたくるのは色々とアレだと思ったので、やめさせようとするが、エリーは止めねえ。意固地になってしまったようで淡々と血を塗っていく。

その姿見て、若者達はエリーが拗ねたのが分かったんだろうな。ちよつとバツが悪そうにすると、『じゃあ俺たち行くわ』『お嬢ちゃんもやめた方がいいわよ』などつぶやいて去って行った。

彼らに置いていかれた俺らの間には微妙な空気が流れていた。諦観と寂しさの混じったその空気の成分は、『やはり、俺らじゃ

あ力二もどき先生を狩れないのかな』って言う自信を無くした気持ちと、彼らの使い込まれてはいるが立派な装備と対照的な自分たちの元廃材の装備を改めて見た事の侘しさだ。

さっきまで、俺とエリーは楽しく先生を釣ることを考えて、作戦たてて。

やったら失敗したけどどうやったらいいか二人で考えて。頑張ったらエロトカゲを狩れて。

これから先生釣るぞってハッピーな気分だったのに。まだ30分と経っていない今の気分はお通夜。

しみみりして、エリーもエロトカゲを地面に落として座り込んでしまった。

そんな俺たちの間には1/4ほどを血に染めた生乾きの上着。その上を秋の涼しい風が寂しく吹いて行く。

なんか鬱なつて来たわ。

そんなこんなで、エリーに帰ろうかと声を掛けようとするが、エリーは下を向いたまま顔を上げない。若者たちに言われっぱなしで、反論もしなかった俺に怒ってるのか？それとも、彼らの立派な格好とゴミがメインの俺達を比べて恥ずかしかったんだろうか？

エリーに悪い事したな…。俺が浅野みたいに何でもできる奴なら、もっといい方法も考えられたのかもしれないし、エリーも恥かかなくて済んだんだ。やっぱり、女神たちの言うとおり、家で大人しくしてれば良かった。俺が行動を起こすと碌なことにならねえよ…。

すまない、悪かったと心の中で土下座しながらも、俺は俯いたま

まのエリーに声を掛けられず、一人で戸棚や石を拾い上げ、先に街道に移動しようとする。そしてエリーの横を通り過ぎようとした時、エリーに俺の革ジャンをピンと引っ張られた。

どうしたエリー？と振り返ると、エリーの前にエロトカゲどもが集まっていた。

一瞬、またエロトカゲに囲まれたかと思ったが、よく見ると、取り囲んでいるエロトカゲは頭が潰れていたり、はらわたが飛び出していたりと、どう見ても俺がさつき潰した奴ら。

「屍役術で動かしてるんだ」

エリーは顔を上げると同時にそう呟き、エロトカゲ達を一行に整列させると、左に一斉に歩かせたり、踊る様にくるくるその場で回転させたりと、ラインダンスをさせ始める。どう見ても死んでるトカゲどもが踊って動き回る様は…まるでマイルジャクソンのスラーだ…。

驚く俺を見て、満足そうに『にぱっ』と笑うと、そのままエロトカゲ達を上着の上に集めて、奴らにダンスをさせる。動き回るたびに傷口が開き、血を垂れ流すエロゾンビども。すぐに上着は血だらけになった。

どうやら、俺と違って、エリーの心は折れていなかったらしい。彼らに悪く言われている時に拗ねたように見えたのは、自分にできる事を考えて、それを実行していたんだろう。俺が彼らの装備を見て落ち込んでいた時に、エリーは自分の力で何ができるのかを考えてたんだ。いじけてたのは俺の方だったんだな。

「すげえな…【屍役術】って死体操れるんだ…便利だな。」

すっかり血だらけになった上着を手に取り、しげしげと眺めながら俺は素直にエリーのスキルを褒める。

「可愛くないから、操る方は普段使わないんだ。他の人には秘密だよ」

エリーは俺が地面に広げて置いた上着に【日光乾燥】を掛けながら、恥ずかしそうにそう呟く。そのまま見ていると、エリーが上着の横にトカゲどもを並べ、そのままいつらにも楽しそうに【日光乾燥】をかけていた。さつきも平気でエロトカゲの死骸を掴んでたし、意外と死体に対して嫌がるなどの抵抗はないみたいだ。天性の物だろうか。

ん？そう言えば、エロトカゲを乾燥させる必要ってあるんだろうか？

そう思うと、生き物を冒瀆しているような気がしたが、あえて何も言わなかった。

しばらく経つと上着がようやく乾いたようなので、いよいよ先生を釣り上げる事にした。作戦はさつきと一緒に。俺が川の中でエリーは橋の上だ。

先ほどと同じ位置まで移動し、上着を『ふあさつ』と投げかけて川に流すと、上着は水を吸い込み、赤い血が少しずつ流れ出した。そのまま上着を『ふーりふり』と動かす。しばらく経つと『ガチっ』と気持ちのいい手ごたえがあり、ついに先生がヒット。どうやら、

血だらけの上着であれば、エサに思えたらしい。所詮は甲殻類のバカだなwwwお前らなんて人間様の足元にも及ばんwww

よっしゃーっと喜び勇んで近くの石に足をかけて引っ張り始める俺。エリーも橋の上で大喜びしてる。

そのまま全力で後ろに体重をかけて引っ張るとついに先生は動き出したようで、ゆっくりとだが浅瀬の方に移動できる。周りに注意しつつも先生の姿を見つつ、どんどん浅瀬に移動。

俺がそのまま引っ張っていると、先生はついにくるぶしほどの深さの所まで付いてきた。正直、先生の体が水の上に出してしまうと、貧弱な腕力しかない俺に引っ張れるのが不安だったのだが、先生は途中から自ら歩いてきやがった。バカめwww所詮は外骨格の脳筋野郎だ。これからフルボッコにされるとも知らずにwwwプーッと笑いが込み上げてくるwww。

先生は自分のつかんでいる物がただの上着であることに気付いたのか、上着から手を離し、威嚇するかのように4本の鉄を振り上げる。どうやら、自分が嵌められたことに気付いたらしい。キシユキシユ言つて口から泡を吹いているが、逃げる気はないらしく、戦闘意欲が旺盛。俺も置いてあった戸棚の扉と拾った石を装備してじりじりとらみ合う。

俺らの位置関係はちょうど、俺と橋の上のエリーの間先生が居る形。作戦通りの理想のフォーメーションと言えよう。俺はエリーを見ると、エリーもわかったように頷いて、手元に積んであった小

石を投げつける。先生の近くに『ドポントポン』落ちる小石。結構近くの足元に落ちていたのでビビってもいいと思うのだが、先生はまるで気にしてねえ。そのまま俺の方にゆっくりとにじり寄ってくる。焦ってエリーが投げた大きめの小石が『ガコッ』と先生のボディに直撃したが、それも気にする様子がない…

仕方ない、当初の作戦とは違うが、真っ向勝負するしかない。サ
イはすでに投げられてしまったのだ。

俺は戸棚の扉をトンファアの様子に左腕に装備。右手には拾った石（中）を持つと、扉に隠れる様に先生に近づく。先生の近くによると、生臭い盥えた匂いが立ち込めていて、非常に臭い。やつつけて持って帰るの止めようかな…匂いが服につきそうだ。

俺がそんな事を考えていたら、先生は鋏を振り上げると、俺めがけて一気に振り降ろしてきた。とっさに盾で受ける。俺の耳元で『がきよっ』と軽い音。何とか防いだと思ったのだが、なんと先生の鋏は威力が高すぎたのだらう。扉を貫通してそのまま鋏を扉の盾に開いた穴に突っ込んだようになってる。引き抜こうとしてもがいているが、どうやら引っかかって抜けないらしい。

もがく先生の力は強く、盾が引っ張られて取られそうになるが、持ち方を変えて取っ手を掴むと、綱引きの様な格好で扉を引っ張り合う。これが無くなったら俺は生身になるので俺も必至。先生の鋏の関節の可動域を考えて、力を加えにくそうな逆側に扉を引っ張ると、何とか五分の戦いになった。

そのまま引っ張り合い、千日手になりそうな気配だったが、その

内に業を煮やした先生は残った3本の鉄を振り回し、扉ごと俺を攻撃しようとする。先生のカニパンチは引っぱり合いで態勢を崩しているためか、一撃目と違い、腰（こし？）の入っていない手打ちパンチだが、それでも俺には十分脅威。扉の陰に隠れる様に防ぐのだが、パンチを食らうたびに扉から木切れが飛び散り、俺の自慢の盾は崩れ始める。エリーがその様子をみてさらに焦り、両手に石を持って投げつけているのが俺の目の端に映るが、小石では助けになりそうもない。ここは自分で何とかするしかねえ。

俺はとりあえず、右手に持っていた石（中）で扉に生えた先生の鉄を殴った。かてえ。まったく効果無し。逆に無理したため少し引き摺られ、先生との距離が近くなってしまった。「ぢぐり」と足に痛みを感じて下を見ると、先生は何十本とある先生の足の内、先がとがった長い脚を俺に絡めて来ていた。切れ味は良くないようだが、爪先に引っかけたチノパンがびりびりと破けていき、俺の脚も切り傷が出来たのかたらたらと血が垂れ始める。

マジでいてえ。死ぬ。このままじゃ死ぬ。

もう扉も2/3ほどしか残っておらず、あと4・5回もパンチを受ければ粉々になってしまっただろう。このまま引っぱり合ってもジリ貧だ。だったら取る方法は一つ。

扉を持った左手を全力で右手の方に伸ばす俺。先生も負けじと逆方向に引っ張る。いい感じに俺が負けはじめ、先生が更に力を込めて俺から扉を引き抜こうとしたところで、自分から左手を扉から離してやった。

途端に先生はストンと脇腹を見せる様に態勢を崩す。チャンスはこれ一回しかない。俺は両手で石を掴むと、大量の足が生えている

根本。先生の脇腹めがけて石をフルスイング。

見事、『バキヨ』という音と共に脇腹にクリーンヒットした拾った石（中）。腹にはあまりダメージはないようだが、大きめの足三本ほどに関節に対して横向きの力が加わり、ペキペキとねじ曲がる。そのままバランスを崩し倒れかける先生。慌てて逃げようとして、ねじれた三本の足がその場にぼろぼろと落ちる。

やったった。勝った。と安心したのもつかの間、俺も足を滑らし、顔面から浅瀬に倒れてしまった。

ぬるぬるとした足場の感触に焦りつつ、起き上がろうとすると、何やらエリーが泣き叫んでいた。何かかと思い、周りを見ると、倒れている先生とは別の方向。俺の横から別の先生が上がってきていた。どうやら、物音と足から流れ出した俺の血に反応したようだ。思ったより動きが早く、すぐそこまで来ている。

慌てて起き上がろうとするが、足場の石につるつるした苔が生えており失敗。ステンと派手にこける。さっきもこいつで滑ったんだな。その間にも迫る先生B。慌てて水中から小石を拾って投げることがやっぱり効かねえ。ずんずんと此方に向かってくる。やべえな。先生の蓋のような口から出す泡がくつきり見える。何となく、パクパク開く様子が、心臓の弁みたいだなと思った。死にそうになったらもっと慌てるもんかと思っただけど、意外と冷静なもんなんだな。あー、また苔でずりつと足が滑って上手く立てんかった。こりゃ、駄

目かもわからんね。ごめんなエリー、こっちくんなよ。

駄目だもう届く。慌ててそばに落ちてた拾った石（中）を投げると、ちよつとは怯ませたが、それだけ。無理。また小石投げる。無理だな死んだわ…

俺の目の前には先生。もう倒れた俺の足の上までやってきており、俺にのしかかる様にこちらに足を延ばしてくる。どうせなら一思いに殺してから、バリボリと食って欲しい。それも水中に持って行って、食われるところをエリーが見なくて済む様に頼むよ。

そう思いつつも、一応小石を拾っては投げる俺。

先生は俺の希望通り、一撃で殺すことにしてくれたのか、鋏を振り上げると足をピンと伸ばし、体を大きく持ち上げる。俺の上で足を踏ん張って立ち上がり、鋏を一本だけ高々と上げた姿はまるでタワーの様に見える。おそらく、地面から鋏までは2mぐらいの高さだ。あれを体重をかけつつ振り降ろして、俺にブツサスつもりらしい。食らった俺は戸棚の扉よりひどい事になるだろう。まあ、腹に当たれば、生きてるだろうが致命傷。胸や頭なら即死だろう。

対して俺はバカの一つ覚えの様に、小石を投げ続けている。自分でもなぜ投げ続けているのかわからんのだが、投げている。先生はそんな俺の姿をあざ笑うかのように、さらに体を持ち上げていく。そんなに力を溜めんでも、もう殺せるぜ。

耳にはエリーが泣き叫んでいる声が聞こえる。

子供の鳴き声ってカン高くてうるさいなあ。と他人事のように思っている、ゴオツと俺と先生、エリーを巻き込み、砂交じりのつ

よい風が俺達の間を駆け抜けていった。砂が入り、目をつぶる俺。エリーも風に巻かれているのか、声が止む。目をつぶると同時に石を投げたが、先生は相変わらずキシユキシユ言ってるところからすると、あんまり影響はないみたいだ。残念だ。俺の死亡確定。そして、その時は訪れる。

フォフォン、ぱしゃん、ドバァン

物体が高速で風を切り裂く音と、バケツの水を散らすような音、そして勢い余って爆発するかのような音を最後に、強い風は止み、辺りにはエリーのすすり泣く声だけが響いた…

To Be Continued…

〜人物紹介〜

エリー

シンガポールの会社に勤めていたイギリス系の部長の娘。たまたま家の家政婦が休みを取ったため、仕方なく会社に連れてきた。暇つぶしに開発途中の『神大陸周遊記』をプレイさせてもらい、こちらの世界に来てしまった。もともと病弱で、病院と家の往復暮らしのため地球の友達はいない。会社で死んでいるのが見つかった時も、病死と判断される。こちらに来た時には、オーマ同様に捨てられそうになったが、アニヤーナがかばう形で保護。奴隷市で売却される

際、アニャーナがルネヴェラに泣いて頼みセツトで購入されて現在に至る。

ルネヴェラの家では家事を担当。体を再構築する際に体質が改善したのか、現在は至って健康になった。好きな食べ物はオレンジ。好きな映画はハリウッドスター。好きな人を聞いたら照れて教えてくれない。病院で過ごすことが多かったためか死体や標本に抵抗ない。本人はもしオーマが死んだら次は自分が主人公だと思っている。（決して悪気はない）

続・ちよつと力ニ殺しに行つてくるわ(後書き)

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者(痴漢)

特記：軽傷(敏捷・体力)

腕力 24(弱い)

体力 20(弱い)

器用さ 10(貧弱)

敏捷 10(貧弱)

知力 64(やや高い)

精神 8(虚弱)

愛情 30(やや弱い)

魅力 18(貧弱)

生命 9(不変)

運 ?? (算定のための経験が不足しています)

スキル

【高等教育】LV・26

【不快様相】LV・1

【鈍器術】LV・2

持ち物

E 拾つた石(中) ∴ 攻撃+22 (先生Bに投擲済み)

E スニーカー ∴ 敏捷+3

E 革ジャン ∴ 防御+5

E チノパン ∴ 体力+1 (半壊)

Eボクサーパンツ ∴ 腕力 + 1
E革ベルト ∴ 魅力 + 1

戸棚の扉 ∴ 防御 + 1 (半壊・先生Aに引っかかっている)

ジーンス ∴ 防御 + 3

アントンの死骸 × 5 (乾燥中)

血まみれの上着

カニ殺しに行ったら伝説の武器引き抜いた(前書き)

前回のあらすじ。

追い詰められた俺。

カニもどきに押し掛けられて、今にも殺されそう。

助かるにはどうやったらいいんだろう。作者も悩んだ。
悩んで5通りの結末考えて、どれにしようか迷った。

A：女神や姐さんが助けに来て、なんやかんやで助かる。(女のヒモでいいよ派)

B：カツコいい俺が覚醒。先生を圧倒して倒す。(チート最強派)

C：助からない。現実是非情である(主人公交代派)

D：死ぬが、エリーの屍役術で復活(とことん不幸になれ派)

E：伝説の勇者っぽいのが助けに入ったよ(テンプレ派)

…いろいろ書き直して結局は…

カニ殺しに行ったら伝説の武器引き抜いた

音にビビった俺がゆっくりと目を開け、爆発するかのような音がした方向を見ると、川を挟んだ対岸に砂煙が舞っていた。

俺の目の前には、先生が足をピンと伸ばしたまま、体を傾けており、鋏を振り降ろそうとしたままびくびくしている。その姿に再度ビビる俺。

うおっ。まだ振り降ろして降ろしてないのか。やるなら早くしてくれ。

……まだ……？

え……何時まで溜めてんの？

しばらくビビる様に両手を目の前にかざしてビクツビクツと怯えていたのだが、先生は何時までも振り降ろそうとしない。どうも体が傾いているし、鋏を振り降ろせないっポイ。なんで？

疑問に思いつつもゆっくりと立ち上がる俺。頭には意味不明な状況に無数のクエスチョンマーク。それを無視するかのようになり、先生は絶賛停止中。口から泡をブクブクと吹いているだけでビデオの停止スイッチを押したように動こうとしない。『ん〜なんで助かったのかな』と思いつつ先生の横に回ると、倒れていた俺からは死角にあたる先生の後ろ半分が吹き飛んだ。切られてたとか叩き割られていたとかじゃなくて、後ろ半分が綺麗に吹っ飛んで無くなっ

た。

見ている俺の前で足に力が入らなくなったのか、その場にカシャ
ンと地面に崩れ落ちる先生。

それでも先生は一応まだ生きているようで、鉄やまだついている
少しばかりの足を使って、川の深い所にズルズルと這いずる様に逃
げ去って行った。

俺の気分は（。。。）ポカーン

『啞然』とか『驚き』じゃなくて

マジ（。。。）ポカーン。

そうやってぼかんしてその姿を見ている間に、先生Aの方も逃げ
去っていた。元居た場所には血だらけの上着と先生Aの足が3本落
ちている。辺りは静寂。エリーのすすり泣く声だけが響いている。
とりあえず俺は落ちていた先生の足三本を拾うとそのまま橋の上に
移動。

俺の無事な姿を見たエリーが涙でグチヨグチヨの顔をしたまま、
抱き付いてくる。

まだ涙目のエリーを慰めつつ、周りを見てみると、さっきの若い

連中や中国っぽい民族服を着た男などの冒険者たちが東門に入っていくのが見えた。

彼らが助けてくれたんだろうか？

しばらく待つて、エリーが落ち着いたのを見計らい、砂煙の上がついていた対岸の川岸に行く。さつき死にかけたばかりなのだから、正直川に近づきたくない。だがそれよりも好奇心が勝った。

対岸の草むらの中に行ってみると、そこらじゅうに先生の砕けた甲羅と肉片がバラバラになって散らばっている。その散乱する肉片の真ん中あたりの位置に、先生の肉片がこびり付いた鉄の棒の頭部分が埋まっているのを発見。周囲に石の破片が大量に飛び散っている事からすると、この鉄の棒が岩に当たり砕いた後、なお地面に刺さったらしい。

なんじゃこれ。全体の8割がた埋まってるぞ。と棒をぐりぐりと回すように力を入れながらエリーと二人で掘ってたらずるっと抜けた。

俺が抜いたのは長さ1mほどの普通のバールっぽいもの。棒の先つちよも二股に分かれており、釘を挟んで引き抜いたりできる様に頭の部分は少し湾曲している。他にはなんか文字がいろいろ彫り込まれているが普通のバールっぽい。それなりに重いがギリギリ俺が持てないほどでもない。

どうやら、これが高速で飛んできて、先生の後ろ半分を吹き飛ば

した挙句、対岸まで飛んで岩を割り地面に埋まったらしい。俺の石では先生に傷一つつけられなかったのに、どこから飛んできたか知らないが、常識じゃ考えられないほどすげえ威力だ。

これは何か名のある武器かもしれん。けど文字読めねえ。見た感じ三角形の頂点から下に棒を降ろしたような企業のロゴマークっぽい物を中心に左右逆向きに同じ文字が掘られている。

「これはたぶんすごい武器だぞ。見た目はバールのようなものだけど。」

「バールのようなものじゃなくて、バールだと思うよ。」

俺の出した結論にケチをつけるエリー。

「いやーそれはないな。ただのバールが岩を砕くほどのスピードで飛ぶことないぞ。少なくとも、伝説クラスのバールのようなものだ。現に刺さった岩から引き抜いたし。」

「お兄ちゃんが引き抜いたのはエクスカリバーとは別物だと思うよ……」

「うーん…書いてある文字が読めればいいんだが…」

そう言えば、ギルドなんかに貼ってある掲示板は読めるのに、この文字読めねえな。というか、なんでエリーも俺も文字読めて話も通じてるんだと思ってエリーに聞くと、再構築の際に共通語をインストールされているらしい。

「じゃあ、この文字は共通語じゃないんだな。多分、神の文字だ」
「神様の文字なの？」

「ああ、間違いない。これはもう間違いなく伝説の武器。岩から引き抜いたし。」

「そうなんだ…バールなのにエクスカリバーと同じなんだ…」

俺の説明に納得したエリーを尻目に、俺がバールのようなものを振るうと伝説の武器はその重さにもかかわらず、ビュンビュンとスイングされる。どうやらこの伝説の武器には【鈍器術】が適用されるらしい。

ちょっと試したくなった俺があたりを探ると、ちょうどバラバラになった先生の破片の内、甲羅の大きい堅い部分が落ちていたので試し振りする。俺に振られた伝説の武器は抵抗もなく甲羅を貫通。2回ほどぶん殴ると、先生の破片は粉々に砕け散った。

「すごい！本当に伝説かも…」

「これは来てしまうな…俺のチート伝説が…」

思わぬ収穫に喜ぶ俺とエリーは、先生の足三本とすっかり乾燥したトカゲの死骸を持って家に帰ることにした。出かけた時は早朝だったのだが、今はもう昼をだいぶ過ぎてる。多分2時ぐらいだ。

足を負傷した俺が、足を引きずる様にゆっくりと家に帰ると、そ

ここでは白いフリル付ワンピースに身を包んだアニヤーナが心配そうに待ってた。怪我をした俺を見て慌てて家の中に入り、すぐに救急箱を取ってくる手当をし始める女神。

「ずっと待っていてくれたんですか？」

「……」

「怒ってます？」

「怒ってます。ただでさえ危ないのに、エリーまで連れて行っただけですよ！」

「で、でも、一応収穫はあったんですよ！」

そう言ってトカゲの死骸と先生の足3本を見せるが、女神は俺を褒めることなく、夕方まで口をきいてはくれなかった。

夜、不用意な行動とエリーを連れて行った事でシヨボンとしている俺の前では、女神が携帯ミラーを立てて化粧をしていた。いつもなら手早く終わらせるのに、なんだか手際が悪く、わざと手間取っているように見える。

まだ俺に怒ってるのかと思って謝る俺。

『いや、そうじゃなくてね。』と無理やり笑いながら説明する女神によると、俺が出かけて行ったあとで、エリーが居ない事に気づき、女神の顧客である冒険者に捜索をお願いしてしまったため、今

日はその冒険者のお相手をしなければいけないらしい。

「強いしい人だとは思っただけどね…」と呟く女神はちょっと嫌そう。

いつもと違うフォーマルなドレスを身に纏い、『ハア…』とため息をつくとき、『2日ぐらいは帰れないかも…彼、色々強いから…』と言って困ったように笑う。

玄関では、件のお客が来ているらしく、エリーと話している声が聞こえる。

ちらつと見てみたが、黒髪に凛々しいイケメンで俺とは大違い。気のせいか遊んでもらっているエリーも俺と居るより楽しそうに見える。

正直、女神やエリーには性欲を感じない俺だが、それでも一緒に暮らしてる女を手玉に取られたようで面白くない。特にイケメンなところが面白くない。

このスケコマシが、と開いている扉から覗みつけてやると、こちらに気付いたイケメンがキラリと白い歯を見せて笑いかけてきて、なおイラついた。

「こーら、睨まないでね」

化粧を終えたアニヤーナが俺の前を通り過ぎ、彼と連れ立って家を出ていく。

お気に入りのお兄さんに遊んでもらえなくなったエリーは、その

まま下ごしらえの途中だった料理の様子を見にキッチンに行ってしまった。

女ってやっぱり男を顔で判断するよな。

ルネ姐ねえさんもそうなんだろうか。

男勝りで勝気な姐さんもイイ男に骨抜きになるのか見てみたい気がしたが、姐さんは今日の分の報告書の仕事が終わってないとかで、俺が帰ってきてから姿を見ていない。

珍しい事もあるものだ。いつも昼過ぎには終えて暇そうにどっか行ってるのに。

そう言えば、女神は心配のあまりイケメンに身をささげるほどだったのに、姐さんには心配されてなかったのな。死んで来いって言われたし。見た目より優しいと思ってたんだがな。けっこう気に入られてると思うってたから、ちょっとシヨックだ。

そうこうしている間に、夕飯が出来上がった。

俺が取ってきたタンバの足は3本しかなかったため、エリーは茹でた足の身をほぐしてご飯に混ぜたカニ雑炊にしたらしい。姐さんの分を2階に持って行ったエリーを待たず、ガマンできずに先に食ってみたが、塩味が効いていてむっちゃ美味い。ズルズルとあつという間に食い終ってしまった。

それにしても、今日は最悪だったわ。
足怪我するし。

チノパンぼろぼろになるし。
それに何より死にかけたし。

やっぱり一人じゃできる事って限界あるよな。

エリーが手伝うたって、危ないことさせられんなー。

「こりゃ、仲間を得るべく動いてみるかな。」

俺は、今日会った冒険者の集団を思い出し、そう一人ごちたのである。

〈魔物紹介〉

タンバ　　オーマ命名：カニもどき先生

トルテポルタ地方に分布する甲殻類の魔物。4つの缺と非常に多い脚が特徴。好戦的で知力が高く、集団で人間を襲うことが多いため危険魔物指定されている。しかし、食肉としての価値が非常に高く、高級食材としての主要特産品となっているため、欲に目がくらんだ初級冒険者が犠牲になるケースが多発する問題があった。ごく稀に川から離れた陸上を歩いて移動している事もあり、その場合は大抵が卵を抱えた雌。この個体を捕獲し、養殖する技術が開発されたため、現在では価格も落ち着き、無茶をする冒険者は減少している。

主な用途は食肉。殻は堅いが、熱が通るともろく変質するため素

材には適さない。ごく稀に体内に魔力のこもった真珠がある場合がある程度。

カニ殺しに行ったら伝説の武器引き抜いた(後書き)

格上相手と戦闘の結果色々ステータスが上昇しました。
鈍器術のスキルが上昇しました。

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者(痴漢)

特記：軽傷(敏捷・体力)

腕力	25(弱い)
体力	21(弱い)
器用さ	10(貧弱)
敏捷	10(貧弱)
知力	64(やや高い)
精神	9(虚弱)
愛情	30(やや弱い)
魅力	18(貧弱)
生命	9(不変)
運	??(算定のための経験が不足しています)

スキル

【高等教育】Lv・26

【不快様相】Lv・1

【鈍器術】Lv・3

持ち物

Eスニーカー ∴ 敏捷 + 3
E革ジャン ∴ 防御 + 5
Eボクサーパンツ ∴ 腕力 + 1
E革ベルト ∴ 魅力 + 1

伝説のバールのような物（命名：エクスカリバー）
ジーンズ ∴ 防御 + 3
アントンの干物 × 5

破棄したもの

戸棚の扉 ∴ 半壊してなくなりました
拾った石（中） ∴ 投げて見つかりません
敗れたチノパン ∴ 処分しました
血まみれの上着 ∴ 処分しました

金に目がくらんだバイト先が超絶ブラックだった件（前書き）

前回のあらすじ。

死にかけた。何かが飛んできて助かった。

地面に刺さったバールのようなものを引き抜いた。

多分伝説の武器だと思う。

つまり作者が助かった理由を後で何とでもできる様に先送りしやがった。

金に目がくらんだバイト先が超絶ブラックだった件

お前らはクズだッ！

クズの癖に、粹がつて突出する早漏野郎だッ！

お前らは人間じゃない！

アントンのゲロに沸くウジ虫程の価値しかッないッ！

整列する俺たちの間を、この世界に場違いな戦闘服を着た男が一人一人の顔を覗き込むように歩き回る。

ウジ虫はすぐに死ぬ！

だがお前らが死んだところで、1ピクル（現地通貨・約10円）の損もない！

お前らの死は乳臭いヒョロ娘が垂れながす卵子の死よりも気に止められない！

おい、その陰毛モヤシ！今回の目的は何だッ！

歩き回っていた男は、装飾だらけで立派な鎧を着ている天パーで女顔の少年の前に立ち止まると、怒鳴りつける様に尋ねた。

「ボズ共の集落を焼き払う事です！」

少年は顔を真っ赤にしながら声を張り上げて答える。

俺に断りなく、勝ッ手に口を利くな！

息もするなッ！

後ろを向き、跪いてケツを上げるッ！

俺の質問に答える時は必ず、『男爵』とつける！

「わかりました、男爵！！」

俺の斜め前の少年はこちらを向き、跪くと、尻を突き出すかのよう
うに高く上げる。

男爵はその様子を一瞥だにせず、そのまま列の間を進んでいく。

貴様らは全員ホモだッ！

ケツの穴でボズの汚れたものを処理するだけのペ スケースだ！

女はボズの淡壺だッ！

ボズに襲われて苗床になるだけの腐葉土だッ！

『陰毛』、息をしてよしッ！

世の中のありとあらゆるものを呪うかのような暴言を吐きながら、
男爵は進んでいく。そのまま俺の前列の右端の女の所まで来ると、
女のおごに手をやり、クイと横を向かせ顔を確認する。まだ若い女
の白い顔が俺の位置からも見えた。

女、ボズの苗床になりたいか？

「…なりたくはありません…男爵。」

甘えるな！

腹から声を出せ！

「なりたくはありません！男爵！」

魔法を使えばボズに勝てるつもりでも思ってたか？

それとも股にボズを挟んで、一緒に天国にイク気だったのか？

それを聞いて女はムツとしたような顔をするが、見咎めた男爵か

ら『その場で腹筋50!』と怒鳴りつけられると、ヤケクソになつて腹筋をし始めた。

俺は股に酢漬けした腸詰肉をぶら下げるしか能のないホモには
厳しい!

だが、女にはもつと厳しい!

ボズ共は俺より公平だツ!

男だろうが女だろうがあいつらは捕虜を余すことなく使う!

性欲!食欲!労働!男女の区別なく行つ!

男爵は女からはなれ、俺の列に移動してこちらに向かつてやってくる。

貴様らは糞弱いツ!

頭も弱く、チームワークもない!

雇えば雇うだけ死ぬ!

そんな貴様ら下級冒険者を統括して・・・

：おいちよつと待て、お前その装備はなんだ?

ふざけているのか?

一人一人の顔を覗き込むように歩いてきた男爵だったが、ふと俺の前で歩みを止め、俺に質問をしてきた。

俺の左手にはエリーと一緒に作った手製の盾。余つたお鍋の蓋に木の板を張り付けて補強したもの。右手にはカニもどき先生との死闘で手に入れたボールのようなものを下げている。

当然に、「ふざけてはいません!男爵!」と精一杯の声を張り上げて答える俺。

元は鍋の蓋とはいえ、木の板は樫のような堅い木を使っており、手製だが十分な強度がある。エクスカリバールに至っては、先生さえ狩れるのだ。何も恥じる事がない。

そう思っただけで自信満々で答えた俺だったが、男爵の顔は見る見るうちに赤く染まっていく。どうやら、激怒させてしまったらしい。

お前はどこのクソだ！

脳天で焼畑をし過ぎて脳が溶けたのかハゲ？

それとも努力してこうなったのか？

延々と俺の前で怒鳴り続ける男爵。結局、バイトの中で一番怒鳴られた拳句、腕立て50回のサービスを頂いて、俺はようやく男爵から開放された。

事の発端は、先生を初めて狩っていた時に話しかけてきた冒険者たちだった。

あの日から足のケガを治すため2日ばかり何もできなかった俺。

彼らの言っていた、アントンの駆除依頼の事を思い出し、暇つぶしにギルドに行くとなまたま彼らがいて、俺の事を覚えていてくれたのか、あっちから俺に話しかけてきた。

あの時最初に話しかけてきた、軽い感じの兄さんがリーダー。
冷静な女魔法使いがサブリーダーで、立派な装備をした線の細い
少年や薬師の女性は単なるPTメンバーらしい。

そのまま挨拶や自己紹介を受けて話している内に、この前から俺
が素人すぎて気になってたんだろ？俺にどうやったら金が稼ぎ
易いかなどの情報を教えてくれる事に。

まあ、親切は有難かったのだが、基本的にニートな俺は『働きた
くないでござる』な状態。なんで、彼らの話を聞き流していたのだ
が、エリーがアントンを狩りたがっていたので（干物が一匹1ピク
ル、つまり10円で売れるらしい。あれからエリーが稼げる唯一の
収入になった）、縄張り争いになった時の事を考えて、親交だけ結
ぶことに留めておいた。

その日からは彼らに会うこともなく、俺はエリーとアントン狩り
を請け負い、週3で駆除を行う程度の活動をしていた。

やり方はエリーが囮となり、幼女に釣られたエロアントンが集ま
った所で、離れた場所に隠れていた俺が、ロリコンを石で（ボール
のようなものは重いからやめた）殴り殺すという単純なもの。

これは意外とうまくいった。エリーが多少危険なのがネックだが、
エリーに棒きれを持たせて振り回させる事で対処できた。

しかし、最初の3回はノルマである20匹を楽々クリアできたの
だが、2週目から奴らも学習したのかエリーに近寄らなくなり、3
日かけても1回の依頼を達成する事しかできなくなってしまった。

それでも、余り物の野菜くずを使ったエサで釣ったりと、色々工

夫をしたのだが芳しい効果はなし。当然、実入りも減りモチベーションが低下する俺達。ひと月もしない内に、週3だったのが2週間で1回依頼を受けるしかできなくなってしまった。まあ冬が近くて寒くなつて来たため単純にアントンの数も少なくなってきたのも理由の一つだが。

その状況に拍車をかける様に女神の収入が減少し始めた。

本人は俺達にバレていないつもりなようだが、朝方に隠れてルネ姐さんに返済の先延ばしをお願いしているのを聞いてしまったので、間違いない。冬は大抵の職業にとってマイナスの影響がある。女神も例外じゃなかったんだらう。

姐さんは返済に興味なさそうだったが、エリー曰く、『意外と契約にはシビア』らしいので、姐さんがこの街を離れるまでに借金の返済が出来なかったらエリーと女神が売られるのは確実なんだってよ。

その借金なんだが、一体どれくらいの借金があるのか聞くと、50トルテ（5千万）だと…。

そんな金額の返済ができるワケない気がするのだが、元々は女神の購入代金50トルテ、エリー30トルテの80トルテなので、1年で30トルテは返済したらしい。日本より物価が安く、それ程大都市ではないこの街の経済規模からすると、かなり頑張っている方だろう。日本の売れっ子風俗嬢でも1年で3000万以上（食費・衣装代等考えるともっとか）稼げるのは少ない方だと思う。

しかし、それでもあと2年はかかる。姐さんの仕事の内容は良く

わからんが、家に家具が最低限しかない事を考えると、そんなに長くこの街に居るつもりはなさそうだ。

どう考えても、アニヤーナとエリーの未来は暗い。

それはつまり、この二人にペット感覚で養われている俺の未来も同じだ。

これはどげんかせんといかん。

でも人手もなければ、金もない。無能力でコネもない。

うんうん唸って2人で考えている内に、俺がリア充の事を思い出した。

「人手が欲しいなら、死体動かせばよくね……？タダだし……」

「アントンを運ぶ時、【屍役術】で動かしてたから、レベルかなり上がったよ…行けるかも…？」

思い立った俺達は、即座に東門外のリア充を埋めた場所へ移動。

場所はうる覚えだったが、適当にエリーが屍役術を掛けると。

『ボコッ』と地面を掘って、半裸のゾンビが登場。
そう言えば、シャツ以外の服、全部俺が脱がしてたわwww

「リア充、久しぶりwww」

と馴れ馴れしく挨拶すると、向こうも俺を覚えていたのか、半分腐った顔でぺこりと挨拶してきた。リアルが充実してただけあって礼儀は正しいようだww

とりあえず、リア充の状態を確認する俺。エリーにはグロすぎるので向こうを向いてもらう。

リア充を埋めていた所は土壌が乾燥して虫や植物も無かった所だったうえ、また秋の半ばに埋めたこともあってか、体の腐食はひと月以上経ってもそれほど進んでいなかった…思ったよりという意味であるが…

トカゲでの実験の結果から言って、別に骨だけでも動くのだが、人目にさらされる事を考えると、肉がある程度ついてた方がいい。まだ大丈夫なうちに、なんか処置する必要があるな…と考えていたんだが、どうやったらいいかさツパリわからん。

俺は理系じゃないし、高校の科目も科学と物理で生物は中学生程度の知識しかない。それでも、聞きかじった知識や、昔学校で習った知識を総動員して死体を保存する方法を考える俺。

砂漠によくあるミイラなら乾燥っぽいし。

あと標本にするならホルマリンか。

ハブ酒はアルコールとかに漬けてるっけ。

うーん。

考えた挙句、とりあえずエリーに【日光乾燥】をかけてもらい、その間に市場で安い酒を買ってきてぶっかけることにした。一応、リア充にリア充的にそれでいいか確認すると、本人はうんうん頷いていたのでよしとする。

さっそく街に戻った俺が市場で行きつけのオバちゃんに酒の事を聞くと、ハブ酒の様に生き物を漬け込むタイプの酒があるらしく、しかも安かったので3リットルほど買う。

ためしに飲んでみたが、かなりきついアルコール度数だ。期待できる。

値段は10テル（1万）以下に抑えた。アントン狩り1回分の報酬だが、必要経費だ。仕方ない。

そのまま俺が酒を持って東門まで移動すると、エリーがアントンを7匹ほど倒してた。

腐ったリア充を喰おうと近寄ってきたところを、リア充に潰させたらしい。これはエリーだけでもアントン狩りができるといって、嬉しい誤算である。

そいつらとリア充に【日光乾燥】をかけて乾かすエリー。

しばらく待っていると、かなりリア充が乾いてきたようなので、アルコールをぶっかけようと思ったのだが、すでに腐っている部分が気になり、リア充に自分の体の腐った部分を先に剥ぎ取らせることにした。

『ズボツ！ドシャツ！』と自分の体を躊躇いなく解体していくリア充。自己解体ってどんな気持ちか気になったが、本人は至って冷静に作業を行う。しかも手際がいい。リア充の生前はどんな職業だったんだろう？聞いてみたいけど、喋れないみたいなんだよな。後でエリーにコックリさんやってもらおうかな。

そうアホなことを考えている内に、リア充は自己解体を終えた。結果として、内臓のほとんどと筋肉や脂肪の一部が無くなり、なんというか、骨とスジが目立つ外觀になってしまった。さすがにグロイので、後で包帯でも買って巻いてやろう。

そうすると、この姿のリア充をリア充と呼ぶのは何か間違ってる気がしてきた。いろいろ考えた結果、『骨皮スジ夫』と命名してやる。ネーミングセンスが安直すぎて、ひよつとすると、スジ夫は怒るかもと思ったが、意外とウケてポロポロの顔で笑ってた。元リア充だからノリがいいのである。俺みたいな根暗だったら下向いて落ち込んでるだろうけど。

まあそんな事よりも防腐処理だ。

ウケて笑い続けているスジ夫に『まあこれでも飲めや』と酒を1本渡して飲ませると共に、元居た穴に座り込んだスジ夫の頭から酒をかけていく。

だらだらとスジ夫の体を流れていく酒。気分は優勝球団のビールかけ。

辺り一面が酒臭くなり、穴の中には酒で小さな水溜まりができる。

そのままスジ夫を穴の中に戻し、上から残った酒をかけた後、穴

に埋めて酒漬にしておいて、その日は家に帰った。

次の日に俺とエリーはギルドでそれぞれ別にアントンの駆除依頼を受けて東門の外に向かった。

1日酒に漬けたスジ夫を穴から呼び出すと、乾燥させて軽く水気を飛ばしたうえで、俺の持っていたスジ夫の服を返してやった。最近はアニヤーナに買ってもらった現地民の服を着ることが多く、革ジャンなどは必要なかったし、スジ夫が喜ぶ顔が見たかったのである。

そして、そのままアントン狩りに近くの林に連れて行った。

結論としては『スジ夫すげえ』。

まず、死んでるから動かない。動かないから気配0。アントンの警戒心も0。

そして酒をぶっつけた影響か、すげえ酒の匂いがする。これがアントンを大量に呼び寄せてるらしく、スジ夫が倒れていると、アントンが数十匹やってくる。そして匂いに酔っぱらってるのか、動きも鈍くなり、狩り放題。30分もしない内に、俺達2人分のノルマを達成できた。

ほくほく顔で換金する俺達。

1日で20テル(2万)以上の収入とは結構な稼ぎだ。

しかし、それでも借金の金額からすると微々たるもんだし、周りの冒険者と問題を起こさないためにも、狩は週3回の依頼が限度だろう。調子こくと、女神の様にリンチされる恐れもある。

スジ夫の維持費（酒）も1週間に1回は酒を1リットル程度かけたほうがいいだろうし。

アントン駆除以外の収入がいる。

これは切実。

かといって、販売員や肉体労働なんてしたくない。働くのはなんか嫌だ。というか、働いても借金総額と相対的な意味であまり金にならない。借金は50トルテ（5千万）なのである。

こんな事なら、兄ちゃんたちが教えてくれた金の稼げる仕事を覚えておけばよかった。そう思ったが、忘れた物はしょうがない。それに俺にアントン駆除以外の仕事ができるかといったら自信もない。なんせ30までバイトさえした事なかったのだ。

そんなんで、ハロワの依頼ボードを見ていると、カニもどき先生の狩猟依頼があった。依頼料は150テル。テント設営（5テル）や販売員（時給応相談）と違った、冒険者らしい依頼だが人気がないのか募集日付が二重線で消されて金額と共にどんどん伸ばされている。

金額が高いのが気になって窓口で聞いてみると、最近、先生の養殖場で温度管理に失敗し、市場で先生の肉が品薄らしい。しかし、トルテポルタ地方の高級料理店での名物たる先生の肉は一定以上の量を確保する必要があるらしく、この値段でも買いたいと言う事なんだとか。

150テル（15万）。それは俺とエリーが1週間に稼げる金の

約5倍である。

しかし、エリーと俺には先生に殺されかけた苦い思い出がある。
エリーに泣かれたのは俺が死にかけてあの時だけだ。

しかし…150テル…2匹とれば300テル…

1週間に2匹とって、それを1年やれば…それだけで15トルテを越す。

女神が今までと同じく、1年で30トルテ稼げば返済が現実味を帯びる額だ。

もちろん、そんなに価格が高止まりすることは考えにくいが、そのペースで金を稼がないと、おそらく女神とエリーが売られる。

女神には、死にそうなところを救ってもらった恩がある…

今でも、実の姉か母親の様に（女神は年下だけど）面倒見てもらってるしな…

悩んだ拳句、俺はエリーに相談して

……

「スジ夫、気をつけろ！近すぎるぞ！」

「おk！いい感じ！釣れたよ！引っ張って！」

俺とエリーは先生に雪辱戦を挑んでいた。

以前と違うのは、スジ夫の加入により橋の下に男2人という布陣ができた事。

それにエリーはスジ夫の他に、エロトカゲ軍団を5匹ほど同時に屍役している。

俺とスジ夫は協力して先生を浅瀬に引き上げる。

この前と同じく、怒り狂って鉄を振り上げる先生。

俺は一旦陸に上がり、先生の殻を砕くことのできる唯一無二の武器、バールのような外観をしたエクスカリバールを装備する。

スジ夫は防御専門なので、エリーと一緒に作ったお鍋の蓋に木を張った円形盾と、廃材から作った大盾だ。置いてあったモノを両腕に装備し、先生の前に立ちふさがるスジ夫。リア充だった時は素手で兵士に向かって行って殺されたスジ夫だが、ゾンビになって落ち着いたのか貫禄がある。

先生はスジ夫の酒の匂いが気に入ったのか、俺を無視してスジ夫に攻撃を仕掛け始めた。わざわざスジ夫が敵をひきつける必要を削いでくれて助かる。

スジ夫は内臓を取ってしまった分、俺よりも多少軽いので、先生の攻撃を受け切れるか不安だったが、耐えてくれている。むしろリア充だった分、俺よりも体の捌きが鋭く、危なげなく渡り合えている。防具も以前と違い、使えるものだと言う事も大きい。

そこをエリーが操るエロトカゲ軍団が、先生の周囲をびよんぴよん飛び跳ねて、注意を引き始めた。それも、スジ夫の邪魔にならな

い様に、俺の方に先生の目が行かない様にと打ち合わせて、計算された動きだ。

噛みつくような動作で飛びつくエロトカゲがよほどウザかったのか。

スジ夫を4つの鋏で攻撃したまま、エロトカゲを蹴り裂こうと右側の鋭い足を延ばす先生。

じつと大人しく息をひそめて先生の間隙を窺っていた俺がそれを逃すわけがない。

俺は先生の後ろからそうっと近づくと、何十本とある足の内、左後ろ周辺の一団に向けてエクスカリバーを野球形式のフルスイングで打ち込む。

『バキバキッ』っという気持ちのいい音と共に、間接の逆向きに力がかかった先生の足の一群は哀れ、へし折れてしまい、先生は大きく態勢を崩す。

俺はこの機を逃さず、先生の後ろ側から上段に構えたエクスカリバーを腰の入った振り降ろしで叩きつける。『ぱしゃっ』という軽い音と共に、エクスカリバーは先生の殻にめり込む様にそのバーのような形状の傷跡を刻み付けると、先生の体に頭の半分を入れ込んだまま、地面に急降下。その場に抑えつけた。

俺が先生を抑え込んだことを確認したエリーはエロトカゲ軍団を川の深い部分に散らす。

他の先生方がやってこない様に、エサにするのだ。

また、スジ夫は先生の鋏の上に大盾をかぶせ、万が一にも反撃されないようにする。

そして俺は、押さえつけられた先生の鋏に。

バールのようなものを一本一本の根元にねじ込む様に突き刺して、解体し、反撃の目を完全に詰んだ。

俺たちの前には、4つの鋏を解体され、左後ろ部分の足をへし折られた先生が、歩くこともできずに、泡を吹いている。

俺は何十年も一緒に過ごしたペットの死に際を看取るかのように、先生を見つめている。

いつの間にか、エリーも川岸にやってきており、固唾を呑んでその時を待っている。

スジ夫はなんで俺とエリーがこんなに緊張しているか理解していないようだが、元リア充らしく空気を読んで手出ししようと思わない。

俺が狙うのは、先生の心臓があるボディの中心部。

俺はそこに狙いを定め、バールの様に先端が二股に分かれたエクスカリバーを構える。

焦って狙いを外さないかという一瞬の躊躇の後、先端を一気に突

き刺すと、エクスカリバーは先生の甲羅をたやすく貫通し、先端は腹から抜けてくるぶしほどの深さの川底に突き刺さった。

その瞬間、上空を仰ぎ見るかのごとく、先生は大きく脚を延ばした。そして、そのまま静かに脚をおろし、ブクブクと蓋を開け閉めして泡立っていた先生の口はそれっきり動かなくなった。

これが、この世界に来た俺とエリー、スジ夫の3人が『初めて』この世界の『冒険者』となれた瞬間だ。

俺がこの世界に来てから四十と数日。

先生との最初の戦いからは約一月後の出来事であった。

T o B e C o n t i n u e d . . .

く人物（魔物？）紹介く

骨皮スジ夫 元リア充

名前不明の元地球人。オーマと同じく地球から飛ばされてきたが、城の領主のスキルチェックで生産スキルがなかったため、比較的悪い待遇を受けていた。そのまま労働奴隷として売られる予定だったものの、周囲の地球人をまとめて兵士と騒動を起こすなど、反抗的な態度が目につき、見せしめの意味で捨てられる。以後の運命は本編参照。

茶髪に東洋人の外見だが、実は日本留学中の香港人。親が金持ち

かつアスリートだったりする。非常に行動的で頭が良かったのだが、軽率な行動も多く、結果として死ぬことになってしまった。

死後、エリーの屍役術で魂を戻されゾンビとして復活するが、肺や心臓などの内臓が軒並み腐っており、喋ることもできない。脳も大部分が死んだ状態のため、魂に刻まれた行動をなぞる事が限界らしく、意思疎通はできるものの、自発的な行動はほぼ不可能。

金に目がくらんだバイト先が超絶ブラックだった件（後書き）

新しいサブ職業を手に入れました。

川漁師

・腕力 体力 器用さ

以下のサブ職業と管理情報で入れ替える事が出来ます

変質者（痴漢）

・体力 精神 魅力

自宅警備員

・腕力 体力 知力

ステータスが上昇しました

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者（痴漢）

腕力 2 8（弱い）

体力 2 3（弱い）

器用さ 1 1（貧弱）

敏捷 1 2（貧弱）

知力 6 5（やや高い）

精神 9（虚弱）

愛情 3 1（やや弱い）

魅力 18 (貧弱)
生命 9 (不変)
運 ??? (算定のための経験が不足しています)

スキル

【高等教育】 Lv・26

【不快様相】 Lv・1

【鈍器術】 Lv・8

持ち物

E たぶん伝説のバールのようなもの (命名：エクスカリバー)

… 攻撃 + 95 (使用者能力不足により過小評価です)

E 強化した鍋の蓋 … 防御 + 28

E スニーカー … 敏捷 + 3

E 一般人の服一式 … 魅力 + 3・体力 + 3

拾った石2 … 攻撃 + 21

ジーンズ … スジ夫の装備になりました

革ジャン … スジ夫の防具です

ボクサーパンツ … スジ夫のデカイ物を隠してます

革ベルト … スジ夫の装備兼かくし武器です。

アントンの干物 … エリーの収入源になりました

おっぱいズの恩返し（前書き）

前回のあらすじ。

死んだりア充がなんやかんやで仲間になったら。
先生を倒して卒業試験に受かった。
そんな感じだったと思う。

おっばいズの恩返し

先生を狩り終えた俺たちは、先生を橋の上に引き上げた。

鉄や足は俺とスジ夫が運び、胴体は重いのでエリーが操って運ぶ。ボロボロの先生が歩いて岸を歩く姿は痛々しい。

よく考えれば、一度ゾンビ化した先生を高級料理店で食べさせるのは、感覚的にどうかと思ったのだが、どうせ金持ちしか食べないと思い、俺が食う訳じゃないからよしとする。

コンビニの弁当だって、作ってる現場は食う人からは見られないのだ。

それに毒がある訳じゃないし、引き渡す時には死んでるから問題ないのだ。

そうやって橋の上に運んだ先生を、俺が依頼主から借りてきた台車に載せていると、例の若い冒険者4人組が偶然通りかかった。俺たちが狩ったカニもどき先生を見つけて、驚く4人。

「おっさん、これおっさんが狩ったの？マジで？ウソだろー！」

相変わらず、チャラさを全開にしたリーダーはソルド。茶髪の髪をピンピンに立たせた『やんちゃ』なタイプだが、それなりに腕がいらしく、ギルドでは意外と顔が広い。

「上着で本当に釣れるのね……。今度私たちもやってみようかしら」

冷静で寡黙な女魔法使いのサブリーダー。銀髪のマギーも初級冒

険者の中ではとびぬけた実力者らしい。

期待の新人であるこの二人が俺と仲良くしてくれるため、ギルドの職員等も俺を覚える様になり、依頼の細かい裏事情まで教えてくれる伝手が出来たのである。

そついう事情もあるので、あまり彼らを邪険に扱うこともできない。

しょうがなしに、色々と質問をしてくる彼らに狩の仕方をそれとなく教えてやる。

先生の狩りは基本的に群れを相手に戦うため、冒険者にとってハイリスクローリターンになりやすく、狩猟報酬が高止まりしている今となつては、一匹だけを相手取ることができこの狩りの方法は秘密にしておきたかった。

そんな俺の思いを知つてか知らずか、俺とエリーの説明にふんふんと頷きながら、イチイチ感心する様子を見せる若手のホープたち。人に説明するのが決してうまいとは言えない俺の説明を一度で理解したのは、流石と言えよう。

「マジでそんな方法で狩れるの？おつさんちよつとその上着貸してくれよ。ウオード、さつそく一緒に釣るぞwwマギーとケミーはサポート頼むわww」

さつそく先生を狩り始める期待の新人を内心苦々しく思うが、隠しても依頼を受け続けられ、いずれは誰かにバレる事だ。

それならば、飛ぶ鳥を落とす勢いのあるこいつらに教える事で恩

を売っておいた方がいい。

ひよっとしたら、うまい話の『おこぼれ』でも貰えるかもしれん。

おこぼれ

冒険者って言うのは大別して3つのタイプに分かれる。

1つは俺の様に個人で適当にギルドの細々した依頼を受ける者。給料は少ないし技能なんて期待もできないのだが、いつ何をどこでどうするかを自分で決める事が出来る個人事業主タイプ。

中身は殆どが下級冒険者だし、実態は副業でやっているおっさんや主婦やフリーターのバイト感覚の奴もいる。冒険者なんて呼び方をしたらダメなような気もするのだが、ギルド（ハロワ）に登録¹¹冒険者なのでしょうがない。文句があるならハロワ言って欲しい。そもそもテント設営依頼や販売員募集をギルドでやる事が問題なのだ。

2つ目はソルド達の様に数人のPTを組んで依頼を受ける者。仲間の長所を生かしつつ、色々な仕事をこなしていく事を生業とする、生活集団タイプ。こいつらは文字通りの冒険者だと思ってくれば間違いない。

正直、冒険者ってやつは、海千山千のいかかわしい連中が多い。バイトや兼業でやってる者も多いし、開示された経歴なんて期待もできねえ。信頼して頼んだ冒険者が依頼金を持ってバックれたり、何処そこの誰かに素材をチヨロまかされたなんて話は、ギルド周辺を歩き回るだけで掃いて捨てるほど聞くことができる。

だから、本気の冒険者は寝食を共にする、4・5人の集団でまとまるのだ。

それ以外の人間はあまり信用せず、よほど信頼できる者以外とは共に仕事をするようなまねはしない。

もつとも排他的だが、多くの冒険者がこのタイプだ。

そして最後の3つ目。最近流行の組織タイプだ。

ある程度名が売れた冒険者になると、信頼できる知り合いや頼ってくる新人・名指しで指名される依頼などの数が膨大になる。これら进行处理するために生まれたのが冒険者家業の組織化だ。

中心となる名の売れた冒険者が責任者となつて、ギルドとは別建てで仕事を受ける。それを雇い入れた信頼できる職能別の冒険者が組織立って処理していき、得た報酬は給料として支払う形式。言ってみれば企業のようなものだ。

振られる仕事は多様で、聞きかじっただけでも

彼らの荷物運びとか。

死体の解体とか処理。

難易度の低い依頼であるならば手下を編成して代理執行させるし。

依頼主への連絡役や情報収集と言った事務方まで。

内容だけ聞くと、ギルドの仕事と変わらん気がするが、報酬はギルドよりはるかに高い。大体同じような仕事でも、2・3倍は軽くあるらしい。

だから俺は借金返済を考えて此処に食い込みたいのだが、伝手がない。

女神の顧客のいけ好かない冒険者もこのタイプらしいが、黒髪イケメンに頼むと女神が借りを作ることになるので、あいつにお願いする案は即廃棄した。この前、エリーの搜索を依頼した時には女神は三日後にフラフラになって帰ってきたのだ。俺に定期的に仕事を回してもらおうとすると、壊されるかもしれん。

だから、若手のホープに恩を売る。

ソルド達は強い。社交性もある。それに将来性。

おそらくは、いくつかの冒険者組織は囲い込もうと狙っているだろう。

そうやってあいつらに回ってきた仕事に、何とか混ぜてもらおう。

10代の若者に仕事を恵んでもらうのは恥ずかしいが、俺のプライドなんて元から無いのだ。プライドでお金は稼げないのである。

慣れない接待行為をした俺の眼下では、さっそく先生を釣りあげた若手の冒険者たちが、キャツキャウフフと戯れる様に先生を囲み解体していく。

「すげー！！超楽う！マジ狩れたWWW」

「もっぺんやろう！ソルド君、もう一度だ！」

先生を狩り終わった期待の新人達はさらに上着を投げて先生を釣

りあげる。

そしてまた一匹、また一匹と殺されていく先生。

俺たちの苦戦が嘘のように川岸に死体が積みあがっていく。

あれだけであいつらは1トルテ（百万）近くは稼ぐだろう…

当然に先生の売却価格は値崩れ。適正価格まで値が下がるのも時間の問題だ。

…ひよつとしたら、大損をこいたのかもしれない…

だが、エビで鯛を釣るといふことわざもある。

俺の取った行動が決して無駄にはならず、カニがクジラを必ずもたらすと信じるしかない。

その思惑がどのような結末をもたらすのかを、俺はこの時は予想だにしていなかった。

先生を狩ってから2日後、撒いておいた種は予想より早く芽を出した。

その日、2匹目の先生の借りを終えて、死体を依頼主に引き渡した俺とエリーが八口ワに報告に行くと、そこには暇そうにロビーに座っているマギーとケミーが居た。

見た感じ、ソルド達男性陣を待っているようだったので、とりあえず会釈だけして受付へ依頼の報告を済ませ、帰ろうとした俺達だが、目の前を通り過ぎようとしたところ、彼女らに呼び止められた。

「ねえ、おじ様、ちょっといいかなあ？」

最初に話しかけてきたのはケミー。

一瞬、おじ様って誰の事がまったくわからなかったが、どうやら俺の事らしい。

ケミーはそのまま俺の左腕に腕を絡めてくると、胸に押し付ける様に腕をかき抱き、キョトンと立ち尽くす俺をズルズルと引きずる様に長椅子に連れて行く。

そして俺の腕を胸に押し付けたまま、俺を長椅子に腰かけさせると、自分も俺の横に寄り添うように座った。

子供っぽく見えたケミーだが、腕に当たる胸の感覚は『むにっ』としており、予想外の柔らかさに鼻を伸ばす俺。

そのまま照れたようにアホ面下げて『でへでへ』していると、さらにマギーが俺の横に座って、甘える様に体を寄せてくる。銀髪のレストランからは青リンゴのような、さわやかですっきりとした匂いが漂っており、薄紅色の口紅を塗ったリップは、まだ熟さぬ桃のような清純さと柔らかさを併せ持っていて、とても愛らしい。

そして、マギーはうるんだ目で俺の目を見つめながら、お礼の言葉述べた。

「おじ様、この前はありがとうございます。おじ様のおかげで私達、結構な臨時収入が入りましたわ」

「いやーww俺は何もしてないよwwマギーちゃんたちが優秀だからだよww」

生まれてこの方、フラグの一つも無かったモテキの到来に、喜びを隠せない俺。言う事は謙遜しているものの、鼻の下を伸ばした顔はエロ親父そのもの。心なしか、長椅子の端に座ったエリーの目が冷たい気がするが、気にしたら負けだ。

「そんなことないです。ケミーたちはおじ様のおかげで助かったんです。」

明らかにエロ親父と化している俺をキモチワルがる訳でもなく、さらにおっぱいを腕に押し当ててくるケミー。右に座るマギーも体を心もち俺に寄せてきた。ケミーほどではないがそれなりに実った果実が俺の右腕にもぶち当たり、俺の右と左でおっぱいがサンドイツチ状態に。

その感触は『むっちり』と『ふんわり』のダブルハーモニー。

黒髪ショートたんの時とは違ったおっぱいズのテクニカルなツイプラトンに俺はダウン寸前。

「それですね、おじ様にどうしてもお礼がしたいと思ひまして、ささやかな宴会の席を用意したのですけれども、来て頂けますか？」

マギーの柔らかな唇から紡ぎだされる、淫靡な匂いのする甘い誘惑。

その言葉を聞いた瞬間、長椅子の端に座るエリーの目が極寒の氷の光を宿した。

「お兄ちゃんはアニやお姉ちゃんだから、お姉ちゃん達にはついて行かないよ」

そう言つて、ふくれっ面を作り、明らかに俺を連れてこうとする彼女らをけん制するエリー。どうやら、エリーとしては、俺に女神や姐さん以外の女が纏わりついているのが気に食わないらしい。

「え！？ でも、おじ様はご結婚なされているわけではないのでしょう？」

「それにい、ケミーたちはお礼の宴会をするんであって、誘惑してるわけじゃないよ」

声をそろえて、エリーに反論するおっぱい。

「誘惑だよ！お兄ちゃんこれ絶対に罠だよ！ついて行っちゃだめだよ！」

興奮して叫ぶように反発するエリー。

幼女の怒りに困ったような顔をするおっぱい。

特にマギーは下目づかいで悲しそうな顔をしており、すがるような目で俺を見ている。

その眼に騙されそうになった俺だったが、冷静に考えると、この状況はおかしい。

俺のようなキモ三十路二トに、こんな美少女2人がおっぱい当

てて宴会に誘うなんてあるんだろうか？

そう考えると、エリーの言った畏という言葉も俄然真実味を帯びてくる。

ひよっとしたら、宗教やキャッチセールスの類なのかもしれん。この二人は俺が先生狩りで小金を稼いだことを知っているのだ。

にらみ合うエリーとケミー。

ここに来て疑う気持ちを持つようになった俺がマギーを見ると、マギーは悲しそうな表情を見せながら、俺の顔から眼を背けた。

「いや、エリーこれは畏とか関係ないよ。ただ彼女らはお礼がしたいだけだよ」

マギーの悲しそうな顔にフォローを入れてしまう俺。

「そんなことない。このお姉ちゃん達、絶対におかしい！」

ケミーを冷たい目で見つめながら答えるエリー。

そんなエリーに半泣きするかのような声で反論するケミー。

困った俺がふとマギーを見ると、マギーは俺の方をうるんだ目で見ながら、声を出さずに、口だけで俺に何かを伝えようとしている。

なんだ、何を言おうとしてるんだ？

口をすぼめて…『す…か？

そして…口を横に開いて…『き…？

『す』と『き』？

『す』『き』

「すき？」

思わず口に出た、俺の言葉を聞いて、にこやかに頷いてほほ笑む
マギー。

すき……スキ……好き！！

…まさかあ…俺みたいなおっさんが、こんな美少女に好かれるな
んてあるかあ？

まさかな、明らかにないだろ。

これで調子のおつて、体に触ったりしたら、『キヤー！痴漢よ！！』
とか言われて、出てきたソルド達に身ぐるみ剥かれるんだろ。『俺
の女に何してやがんだ』とか言われちゃってさwww

体に触ったりしたら…か…

ちょっとぴりだけ触ってみるか？

あくまでも、自然な感じで、『右腕を椅子に付けたら、座ってい
るお尻の部分に当たっちゃったあ』みたいな感じで。

…おっと、あたっっちゃったあ…

叫ばないな…怖くて顔を見れないけど。

ちよつと、撫でてみるか？

いや、危険だな。もし叫ばれた時に言い訳が効かん。

言い訳が効くやり方…腰に手をまわしてみるか。これなら友達同士のふれあいで、自然っぽい。尻と違って、さわやかだ。

そう思った俺がマギーの腰に手を回すと、彼女は嫌がるどころか、優しい目で俺を見つめ、自分も俺の腰に手をまわしてきた。

これはガチでモテてる。間違いないお。

だって、俺の腰に手をまわしてきたんだ。

もし美人局なら、この瞬間に声出されて男出てきてるし。

しかも回すだけじゃなくて、腰から背中一帯を優しく撫でてる。

これはガチ。マギーは俺にべたばれだお。

「エリーは悪い子だな。親切で誘ってくれてる女性を悪人扱にするなんて」

今まで味方だと思っていた俺の口から出た言葉に、ケミーと口げんかしていたエリーが驚いた顔を見せる。

「え……どうしちゃったの？お兄ちゃん？」

心から信じていた者に裏切られたかのような顔をするエリー。その愕然とした表情にたじろぐ俺。

しかし、俺の背中を這うように撫で続けるマギーの手の感触には抗えないお。

「いいか、エリー。お姉さん達はわざわざ俺達をここで待って、お礼をしてくれようとしたんだぞ、それをいきなり悪人扱いしたら失礼だろう？お姉さんに謝りなさい、エリー。」

調子こいて、マギーの尻を撫でるようにさわさわしながらエリーを諭す俺。マギーは全く嫌がらずに俺に体を預けてくる。あああ、いい匂いだお。銀髪に顔埋めてクンカクンカしたいお。

俺の言葉に、エリーと口げんかしていたケミーも抱き着くように俺に体を密着させて、おっぱいを押し付けてくる。

その様子を見て、今この場に独りになったことを悟ったエリーは、怒った顔のまま涙を流すと、何も言わずに椅子から飛び降り、ロビ―を風のように走り去っていった…

慌てて後を追おうとした俺に2人は、

「あの年頃の女の子は、わがママを言って年上の男性を独占したがるものですわ」

「あんまり我儘を許すと、駄目な子になっちゃうよお」

といい、俺は彼女らの予約していた酒場付ホテルに半ば引き摺られるように連れて行かれたのであった。

それからちょうど24時間が過ぎた今。

俺はなぜか、野営のテントの設営をしていた。

さっきの話から言って、ボズとかいう魔物の集落を襲うらしい。

昨日、あれから俺はマギー達と飲んでいたはずだった。

そのまま酔いつぶれて、朝、起きたら、ソルド達と一緒に荷馬車に乗せられていた。

馬車の乗降口には見覚えのないデカイ親父。

俺が起きた事を確認すると、名前とスキルブレスレットのチェックを要求された。

ビビりながらも、スキルブレスレットを見せ、名を名乗る俺。

なすがままにされている俺の目の端では、資材に占領された車内の一角で、マギーがこちらに謝るような仕草をしているのが見えた。

何が起きているのか全く理解していない様子の俺と謝るマギーを見て、親父は何か得心がいったのか、丁寧にも俺に説明をしてくれた。

親父曰く、俺はなんかの依頼に参加したらしい。

報酬は成功報酬で基本一人2トルテ(二百万)。

怪我の保証はしない(労災不適用)。

死亡時には報酬が支払われない。(雇い主丸儲け)

働きのいい者には、別途、報酬を上乗せする。(働きの判断は不鮮明)

仲間から俺の分の契約書もあずかっているから、逃げようとして

も無駄。

文句があるならあそこのねーちゃん達に言うんだな、ガハハハハ
！！

そう言っつて、乗降口に戻る親父。

そして、相変わらず、祈る様に手を合わせて俺に謝る仕草を続けるマギー。ソルドを見ると焦ったように目を逸らされた。

そう言えば、昨日の飲み会で『お金の儲かるバイトしたくない？』
つて聞かれた気がするわ。金額も2トルテだった…

酔った状態もあつてか、『そんなバイトがあるのなら是非してみたいものだね』と答えた俺だったが、ソルド達も『じゃあ、今度、空きがあるか聞いてくるよ』と笑いながら言っただけで、それ以外には何も言われていなかった。酔った勢いで金に目がくらみ、『是非してみたい』とは言ったが、受けるかどうかは話を聞いてから決めれば良いと思っただんだ。

それが昨日の夜の話である。

で、起きたら馬車。面接とか経歴チェックとかなし。

ありのまま起こったことを話すと。

『俺は美少女と飲んで起きたら、ブラックバイトに採用されていた』

催眠術とか洗脳魔法とかそんな手の込んだものじゃ断じてねえ。

もっと単純な何かに引っかけたぜ…

そう、つまり俺はマギー達に騙されたらしい。

今更ながらに『お兄ちゃんこれ絶対に罠だよ』と叫んでいたエリーの姿を思い出す。

報酬が高い事だけが唯一の救いだが、それはそれだけ危険も高いと言っ事。

エリーとスジ夫のサポートがなければ、無能な俺にできる事なんてほとんどねえ。

今更ながらに、後悔する俺の目の端で、俺と一緒に詰め込まれたのであるうエクスカリバーは、馬車の乗降口からさす弱い光を受け、その黒い体に鈍い光を反射させていた…

T o B e C o n t i n u e d …

おっぱいズの恩返し（後書き）

剣使うからソルド。壁役だからウオード。
魔法使いでマギー。アルケミストでケミー。
名前は覚えなくてもイイです。

ちなみにマギーの『すき』
の部分は本来は日本語ではないので口の形が実際は違います。

【基本職】ニート 【サブ職業】川漁師

腕力	28	(弱い)
体力	23	(弱い)
器用さ	11	(貧弱)
敏捷	12	(貧弱)
知力	65	(やや高い)
精神	9	(虚弱)
愛情	31	(やや弱い)
魅力	18	(貧弱)
生命	9	(不変)
運	??	(算定のための経験が不足しています)

スキル

【高等教育】 L V ・ 2 6

【不快様相】 L V ・ 1

【鈍器術】 L V ・ 8

持ち物

E たぶんバールのようなもの（命名：エクスカリバー）

∴ 攻撃 + 9 5（使用者能力不足により過小評価で

す）

E 強化した鍋の蓋 ∴ 防御 + 2 8

E スニーカー ∴ 敏捷 + 3

E 一般人の服一式 ∴ 魅力 + 3 ・ 体力 + 3

E 拾った石 2 ∴ 攻撃 + 2 1

初めて現地民と過ごしたった(前書き)

色々書き直して、迷った挙句、浅野パートで入れるはずの部分を
今回ちよつとこつちに移した。

細かい文章表現は違和感あつたら成形しなおすかも

前回のあらすじ。

おっぱい押し付けられて飲み会行った。
起きたらブラックバイトに参加してた。

初めて現地民と過ごしたった

『がさり、がさり』

初冬だというのに、緑にあふれる森の中を、がさがりと一歩一歩、落ち葉を踏み分けて歩いて行く。

一歩進むたびに立ち止まり、辺りの気配を探るが、ついこの間まで引きこもりの一般人だった俺に気配なんか探れるわけもないので、ほぼ気休めかもしれないが、こういうのは心の問題である。

そのままゆっくりと森の中を歩いて行くと、陰っていた太陽（？）が雲間から顔を出したのか、俺の居る森の中までその光を差し込んできた。

その暖かい光にほっと安心して、水を飲みたくなり、マギーからもらった煙草大の携帯水袋を取り出して、一口飲み唇を濡らす。

水を口に含み、水袋をポケットに入れてみると、何やら『バキツ』と枯れ木を踏み割る音が俺の右斜め前、15メートルほど離れたやぶの方から聞こえた。そちらに目をやると、白くて丸い毛も眉毛もないサルの頭がやぶの中から突き出して、俺を無表情に見つめていた。

つるつるした肌に、隆起がなく平たい顔に鼻腔だけが開いた鼻。唇の無いデカイ口。白目がなく黄色だけの目を見て途端に固まる俺。

3秒ほどその場で見つめあっていたが、白頭は挨拶するかのよう
に笑い、デカイ口を『にいつ』と開けてそのサメのような歯を口
から覗かせると、やぶをガサガサとかき分けこちらに向かってきた。

その体格は約1メートル半。

その体格と同じぐらいの長さの両腕。

頭部と胸、それと腹部以外は白い毛皮におおわれており、まるで
白いテナガザルのような姿をした生き物。

黄色い目は驚いたように見開いており、三日月形に笑う口の中の
歯も黄色く光っている。

俺が驚いて走り出さない様に手を後ろ手に組んで害意が無い事を
示しつつ、ゆっくりと近づいてくる白頭。あまりにゆっくりだった
ので気づかなかったが、距離はもう10メートルほどだろうか。

慌てて、俺が踵を返して逃げ出すと、『うひいつ』という叫び声
と共に、辺りの茂みからもガサガサと音をたてて、他の白頭が2頭
出てきた。どうやらすでに囲まれていたらしい。やはりビビって周
りを警戒しながら歩いておいてよかった。奴らの気配は感じれずと
も、奇襲を避けられれば、奴らは長い腕が邪魔してそれほど速く走れ
ないのだ。

森の中を転倒しない様に、奴らを引き離さない様に、全力の6割
ほどの速度で走り抜けていく俺。

奴らはその中途半端な速度と、俺の弱そうな見た目からか、格好
の獲物と判断したんだろうな。決してあきらめずに『いひひひ、う
ひひ』と笑いながら付いてくる。

人を使役して労役も課すというので、実際に奴らに掴まった場合もコミュニケーションが取れないわけでもないと予想できる。しかし、昨日毒矢を受けた白頭は死ぬ寸前まで笑顔でニコニコしていたし、一昨日のは剣で腹を裂かれて死にかけているというのに、無表情で空を見ながらずっと草を引きちぎっては口にし続けていた。

地球の野生動物であっても、怪我をしたり、死にかけたりすれば悲しそうだったりつらそうな表情を見せるので、俺たち人間も『可哀そうだな』とか『悪い事したな』などと感情を揺さぶられたりもするのだが、奴らに関しては一切そう言うシンパシーを感じない。

そういうやつらの反応は地球の人類学者でもあればとても興味を持ちそうな生き物だと思うので、もし将来こっちに送られてきた学者を見つけたら報告してみようと思う。

そうこうしている内に、前方に目指す森が開けた場所が見えてきたので逃げるように飛び込む俺。そこに居る見慣れた面々の横を全力で通り過ぎる。

後ろからは白頭の猿共が気味悪いぐらいの黄色い三日月口の笑い声が『うひひひひひひひひひひひ』と叫んでいるのがまだ聞こえる。

そして森の中の小道を走り抜けた俺を追って、開けた場所に飛び込んできた白頭。

その姿に吸い込まれるように大きな氷と毒矢が叩き込まれた。

『うひゃっ』『うふっ』

まるで少女たちが戯れているかのような声を上げて倒れる白頭2匹。

遅れて飛び込んできた最後の1匹は何が起きたか理解する前に、
ウオードとソルドの武器で串刺しにされていた。

「お疲れーっすwww」

白頭を足蹴にして、喉に突き刺さった長剣を引き抜きながらソルドが笑顔で話しかけてきた。

「今回は3匹だったが、問題なかったかな」

「こっちは問題ないっすよwww遠目におっさんが集団に追いか
けられてるの見て、マギーが焦ってたけどwww」

「焦ってなんかないっせば！」

「いや、マジでマギーは焦ってたんすよwww俺はおっさん信じて
るから大丈夫だって言ったんすけどねwww」

「だから！違っつてば！」

そう軽口を叩きながら、毒矢と氷を食らった白頭に近寄る期待の
ルーキー達。

マギーが放った氷は完全に白頭の頭をとらえた状態で地面に突き
刺さっており、生命活動は完全に沈黙。間違いなく死んでる。

もう一方のケミーの毒矢を食らった方は、毒矢の刺さる腹を長い腕で抑えて蹲っていたが、10秒としない内に眠る様にその場に『びえしゃっ』と崩れ落ちた。

「死んだの？」

「大丈夫ですう。今回は適量なはずですう」

さっそくロープを持ち白頭に近づいて行ったウオードとケミーが体を麻痺させた白頭をぐるぐると縛り上げると、そのまま担ぎ上げて2人で男爵が待つ本陣に運んで行った。

残された俺達は、殺した2匹のボズの足にロープを結ぶと、ズルズルと引き吊りながら処理場に移動する。

「これで18匹ね。」

「ノルマ十匹だったじゃん。なんだ、今回余裕じゃんww」

「他の班はそうでもないよ。9班44人の内5人も死んでるらしいし」

「マジかよ…まだ突入前なのになあ」

「私たちももしPTがバラバラにされてたら危なかったわよ…」

そう言ってこちらに笑顔を向けるマギー。

銀髪のストレートをポニーテール上に束ねた彼女の笑顔を見て、俺は照れたようにそっぽを向く。

3日前の整列後、50人の初級冒険者を班分けする作業があ

ったのだが、ソルド達に俺を足した5人は元から5人PTと申請していた為、最初から同じ班にされた。

その時まで、ソルド達がなんで俺を騙してまでこのバイトに連れてきたのか分からなかったが、どうやら5人そろってないとPTとしての参加はできないらしい。実際に他の奴らは、見た感じ恋人のようなカップルや兄弟のような3人組もバラバラにされて適当に班分けされていた。

班分け後、俺はひよつとして囷として捨てるために連れて来られたかと思っただが、訝しがる俺にマギーは『仕事は私たちに任せ、後ろでじつとしてくれてればいいから』とだけ言って、それ以外には何も要求なし。実際、森の中でボズを間引くための戦いでも俺は後衛職のマギー達の後ろで突っ立っただけだった。

具体的には、森の中をウォードたちが先行してボズを見つけだし、逃げ道を塞ぎながらマギーとケミーが氷や毒矢を使い仕留める。そして倒したボズを森の中からえっちらおっちら担ぎ上げながら本陣横の死体置き場まで持っていき、また森に戻る。

その間、俺は突っ立っただけでいい。らしい。

そうやって3匹ほど倒したところで流石に不安になり、マギーに俺も何かしたいと言っただが、逆に『何かされると邪魔になるからやめて』的なことをやんわりと言われた。

マギー曰く、そもそも職業的冒険者というものは、普段から組む相手が決まっているため、そのPTの癖が骨身に染み込んでおり、他の冒険者と臨時PTを組んだとしても、息が合わなく逆に危険な

ことが多いらしい。

だから、こういった集団討伐に参加する際には、なるべくPTで行動できることを参加条件にするのだけれども、今回は4人でなく5人参加が条件だったうえ、補欠として入ってもらはずの冒険者が直前にビビってバツクれたらしく、代役を騙してでも連れてこようとしただけなんだそうだ。

そんな事までしてPTで動く必要があるのかその時には疑問だったのだが、実際に死んだ5人の内、3人は仲間と離れ離れになった後衛職であった事からすると、そんなもんなのかもしれない。

まあ、とにかく俺はそのままソルド達の後ろでボケーと立っているだけだったのだが、どうにも気持ちが悪い。

そもそも、俺はニートであるから働くのは基本的に嫌だ。

でも、だからと言って金を貰っている仕事で『何もするな』と言われて『ハイソウデスカ』と言ってゆったり構えていられるほど、精神も強くない。俺は大学で引き籠るまでは、掃除も授業も一切サボったことなく、学校の宿題は必ず行い、カンニングはせず、給食は残さず食べるなど、真面目一辺倒でやっていたのだ。

大学で引き籠ってニート化した今ではそんな事気にせずともいいと思うし、日本人の勤勉さが染みついてしまっている訳でもないのに、すげえ罪悪感を感じる。なにせ、俺を騙して連れてきた奴らとはいえ、彼らが命を張って仕事をした分け前にタダ乗りするようなもんだからな。

だから、なんかしたいなと思って4人の後を付いて行くのだが、なんもやることなし。

敵が来たらウォードが止めて。

周囲を警戒しながらソルドが全体を指示。

マギーが魔法でボズを殺し。

ケミーは俺を含めた後衛周辺の警戒とマギーの補助。

マジで4人で仕事完結。

俺の入るとこなし。

しいて言えば、こちらの人数が多すぎるために、ボズと遭遇した瞬間にあちらが逃げて行ってしまう場合がある事と、森の中で殺した死体をわざわざ担いでキャンプに戻り、また狩りに戻るため、仕事率が非効率である事ぐらいか。

これを解決するためには、誰か弱そうなやつが森の中からボズを釣ってきて、入口付近で殺せば解決すると思うのだが、本来それに向いてそうな俺が詐欺同然で連れて来られているために言いだしにくいんだろうな。と一人考えて納得していた。

そうこうしている内に、森の中で4匹目を退治して2日目は終わったのだが、3日目の朝に余りにもヒマだったので俺は自分から彼らに囿役を提案した。

俺が囷をやると話したとき、彼らはアホを見る目で俺を見た。

一瞬、なんでアホ扱いされるかわからなかったが、話している内に分かったことによると、今まで囷をつかって狩りをした事がないらしい。

ネトゲや地球の歴史上の合戦などに慣れ親しんでいる俺からすれば、囷ってのは使い古された作戦だと思っただが、彼らにとっては危険な森に入って逃げてくるだけのイミフな行為に思えるのだろう。

そのまま話し合いを続けたが、どうにも的を得ないようなので、彼らには森の入口で待機してもらい、試しに一度俺が猿共を釣ってきてみることにした。

心配する彼らをおいて、森に入っていく俺。

よく考えれば、危険極まりない行為だが、逃げていく彼らのスピードが俺よりも遅かったことを思い出して『奇襲だけを受けない様にすればいい』と気を付けながら森を進んでいき、一匹見つけた所で石を投げて気を引き入口まで連れ帰ってやった。

結果、彼らは囷の効果に非常に驚きを感じたようだった。

それからすぐに囷でボズをおびき寄せる案に賛成したソルド達。

その日のうちに10匹以上の数のボズを仕留め、他班の追隨を許さぬスピードでノルマを満たした俺達は男爵から捕獲の仕事を別建てで依頼されるほどまでだった。

そしてその夜、ソルド達は興奮を隠そうとせず、囿のやり方を俺から聞き出そうと夜通しで俺に話しかけ続けた。

特にPTの頭脳を担当しているマギーは釣り方や待ち伏せ方法まで、俺に根掘り葉掘りと質問を繰り返し、しまいには紙を取り出してメモまでする始末だった

そして今、ウォードたちがとらえたボズを本陣に運んで行った事のできた、わずかな空き時間を惜しむかのように、マギーは俺から知識を吸収しようと貪欲に質問をしてくる。

なんで、ボズをおびき寄せようと思えたの？

それにタンバを釣る上着に血を染み込ませる考えを持てたのはなんで？

そう言っつて、子供が大人に質問するときのようなキラキラした目で俺に質問を投げかけてくる。

その姿はほんの4日前に俺を誘惑した悪女のような姿とは似ても似つかない…

…カニの時にも思ったが、どうもこの世界では知識に偏りがある

気がしてならない。

カニを釣り上げたり、猿をおびき寄せたりなど、一般的に読書や教育を受けていれば考え付くようなことであっても、やり方を知らなかったか（概念がないためやるうとさえしないと云った方がいいのか）と思えば、矢に『適量の』麻酔を染み込ませて魔物を捕獲できるほどの知識を得ることが出来ていたりして、ちぐはぐな印象を受ける。

ルネヴェエラ姐さんと話している時に『技師の数が少ない』という話を聞いたことがあったが、技師と言うよりも学校教育を受けている人自体が少ないのではないだろうか。

おそらく仮説ではあるが、これは『スキル』という制度に頼った知識伝達の弊害だと考えられる。

おそらくであるが、かつてのルネヴェエラ姐さんの言葉『知識をモジュール化して固定化』したものと表現されたように、スキルによって得ることができた知識はパッケージ化されたブラックボックスのようなもので、その構成要素自体を脳が学習できた訳ではないのである。

たとえば【理系・電力】スキルの購入によって、発電や電気回路の設計が可能になったとしても、その元となっているはずの【物理学】はスキルの構成要素であるはずだが、その物理学を力学の計算に使うことができないという様に、スキルに関係ない部分で知識を使おうにも利用できない様になっているのではないだろうか。

本来であれば学校教育を通して理論立てた体系を元に学習し、応用の効く考え方ができるようになるはずであるが、一足飛びに技能

を得てしまったがために、突き当たった問題に対して、答えを得るまでのプロセスの練習が出来ていない可能性がある。

そのために生まれたのが彼らの持つ『ちぐはぐな知識』だと思う。夜の大通りを照らす街灯の下を木で作った粗末な馬車で駆ける中世ヨーロッパ風の人々。

その街灯と同じものが家であれば暮らしもずいぶん変わると思うのに、高級レストランの中にさえ電灯はなかった。

不自由であっても、それを不自由だとは思わない彼ら。

そこにモノがあるのなら『学んで』作ればいいと思うのだが、知識を『買って』作る事に脅迫的にこだわっている。

まるで世界を管理している『神サマ』が民に与える知識以外を持つことを禁止したかのようだ。

だとすれば。

『なんでなんで』と貪欲に欲しがるこのマギーに考え方を教え、色々と質問に答えている俺は、樂園に住むイブに知恵の実を食べさせている蛇のようなものなのだろうか。

だとすれば、俺がこうやって物の考え方をマギーに教えていく事は世界を管理している『神サマ』に対する反逆になるのだろうか？

いや…そもそも技師に必要な技能をスキルで伝達できるのであれば…なぜ地球から人を呼び寄せようと…思ったんだ？

キラキラと目を輝かせながら、俺に質問をし続けるマギー。

その姿にこの世界に来て初めて『呼びだされた理由』に疑問を感じた俺であった。

初めて現地民と過ごしたった(後書き)

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】川漁師

腕力	28 (弱い)
体力	24 (弱い)
器用さ	11 (貧弱)
敏捷	13 (貧弱)
知力	65 (やや高い)
精神	9 (虚弱)
愛情	31 (やや弱い)
魅力	18 (貧弱)
生命	9 (不変)
運	?? (算定のための経験が不足しています)

スキル

【高等教育】 LV・26

【不快様相】 LV・1

【鈍器術】 LV・8

持ち物

E たぶんボールのようなもの(命名:エクスカリバー)

∴ 攻撃 + 95 (使用者能力不足により過小評価で
す)

E 強化した鍋の蓋 ∴ 防御 + 28

E スニーカー ∴ 敏捷 + 3

E 一般人の服一式…魅力+3・体力+3

携帯水入れ…マギーがくれた探索の必需品 煙草大の大きさ

無くしたもの

拾った石2

…家の前に置きっぱなしです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453x/>

無能な三十路二一トだけど異世界来た

2011年11月21日21時42分発行